

大賀世2・3号墳の出土遺物について

上野利明・中西克宏

I はじめに

ここに紹介する資料は、昭和35年に工事中に発見された大賀世2号墳⁽¹⁾と、昭和57年度国庫補助事業として実施した大賀世3号墳出土の須恵器・埴輪⁽²⁾である。これらの出土遺物は、須恵器・土師器・円筒埴輪・形象埴輪があり、特に埴輪類の出土量が多い。2号墳については、土地所有者からの寄託という点から、従来その一部のみ紹介されていたが、3号墳との対比、および群集墳として捉える上で必要と考え、ここに所有者の承諾⁽³⁾を得て発表した。

大賀世2号墳は、東大阪市六万寺町にあり、工場建設工事の際に発見され、一部について調査が実施された。この時の出土状況から、南に隣接する大賀世古墳の埴輪と考えられたが、古墳の規模等を考えると疑問点も多く、行政上は半堂遺跡として周知されていた。しかしながら、大賀世3号墳の調査により、3号墳が周濠をもつこと、周濠内の堆積土および遺物出土状況から、2号墳の遺物についても周濠内出土の可能性が高く、大賀世2号墳として位置づけたものである。大賀世3号墳は墳形は不明であるが、周濠を有する古墳⁽⁴⁾で、墳丘はすでに削平されている。埴輪等の遺物は、削平された際に周濠内に堆積したと考えられる。

これら2基の古墳は、東大阪市の東部、生駒山地の裾に広がる複合扇状地の上部に位置し、標高30m～35mの地点である。2基の古墳は、3号墳が工事中に発見されたため、不明確ではあるが、約80mの距離にあり、比高は約5mである。この2基の南約250mには、大賀世古墳が隣接している。

今回、ここに紹介した資料については、まず円筒埴輪・形象埴輪相互の調整技法等の関連性および、形象埴輪製作における技法の共通性等を明らかにしたい。さらには、2・3号墳の埴輪の比較を通して、大賀世古墳群内における埴輪供給について考えていきたい。

本稿作成にあたり次の方から御協力・御助言をいただいた。記して謝意を表する。

岩崎直也・置田雅昭・藤井直正

また、下記の諸氏には遺物実測・製図等の協力をいただいた。記して謝意を表する。

相田正明・有山淳司・浦元英俊・大野佳子・大西純子・岡村多美子・高石俊也

長峰繁己・藤本敦子・本田圭子・山口靖弘

Ⅱ 2号墳出土の埴輪

2号墳出土の埴輪は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、人物・動物・器材等の形象埴輪がある。円筒埴輪では底部の破片が多くみられる。以下、個々に説明を記す。

円筒埴輪

円筒埴輪は法量、調整技法を中心に大きく6類（A～F）に分類した。口縁部と底部の数量は、圧倒的に底部が多い。口縁部については形態により2類に分類するに留まった⁽⁵⁾。

A類（第1図 1～10）は、底径よりA₁、A₂類に分けられる。外面の調整はタテハケ、内面はユビナデを施し、底部調整は外面に板を当てるものと指で押えるものの2種類が認められる。基部の高さは8.5cm～9.5cm前後のもので、底径はA₁類18.2～20.6cm、A₂類11.6cm～14.2cmを測る。突帯は退化し、低くなるものの明瞭な台形を呈している。

B類（第2図 11・12）は、2点のみであるが、A類に比して底径、基部の高さともに小さい。外面の調整はタテハケ、内面はユビナデを施し、底部調整は外面に板を当てて行う。突帯は底い台形を呈し、下端をヘラ状工具でなでつけている。

C類（第2図 13・14）は、底部調整を行わないため、底部が内外面に大きくはみ出す。内外面の調整はユビナデ、タテハケである。

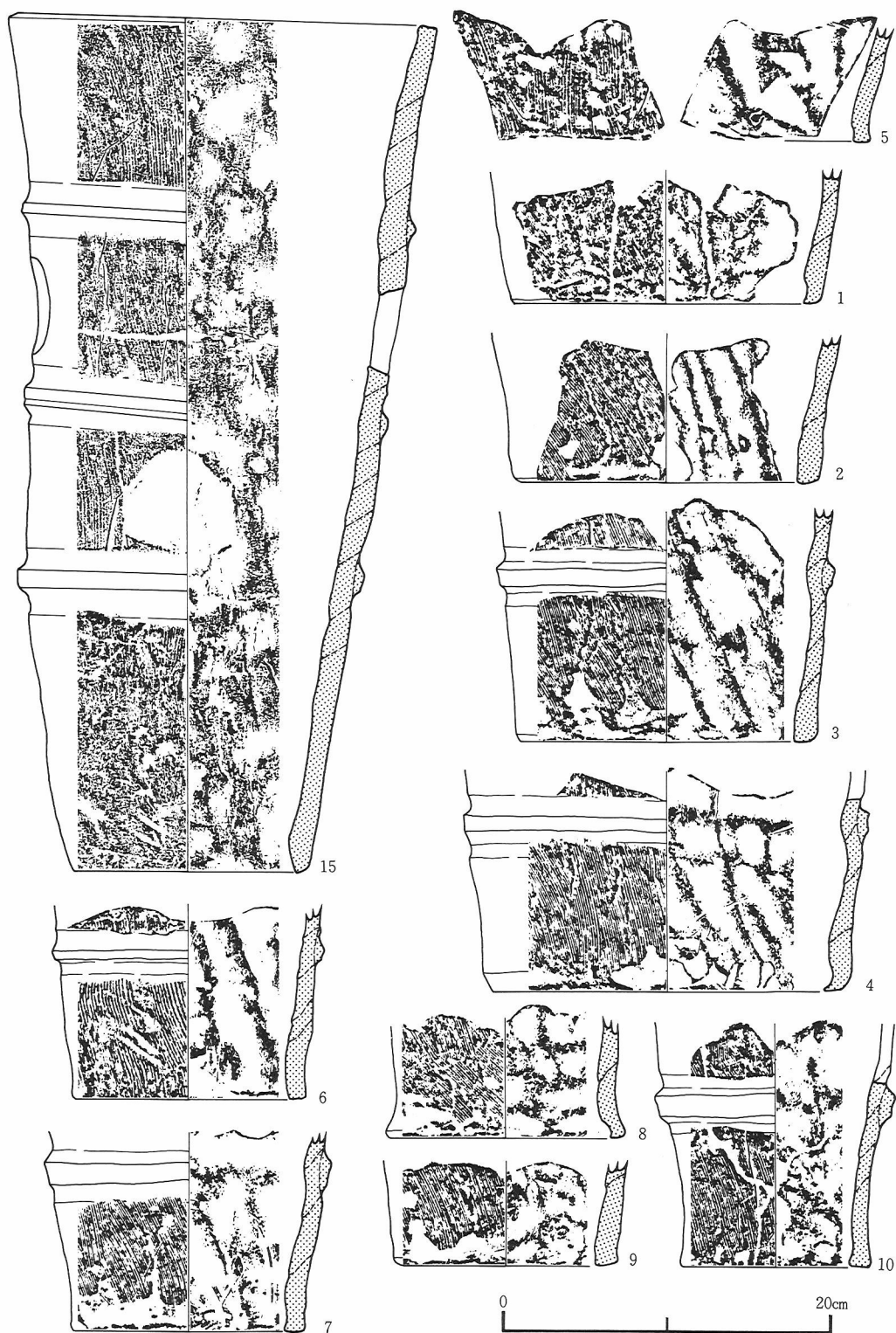
D類（第1図 15、第2図 16・17）15は、口径25.6cm、高さ51.6cm、底径14.0cmを測る。突帯は3条で、1段、3段に一对の円形のスカシを持つ。基部のみ長く14.8cm、2段目以上は9cm前後と短くなる。調整は外面にタテハケを施す。基部のみナデを施し、ハケメが消されている。内面にはユビナデを施す。また、底部調整は外面に板を当てて行う。

E類（第2図 18）は、外面にヨコハケを施し、基部はさらにナデを施す。内面はユビナデを施す。底部調整は外面に板を当てて行う。2段目外面のヨコハケは、川西氏の言うB種ヨコハケに近いものである。

F類（第2図 19～23）は、外面はヘラ状工具で左上りにナデる。内面はユビナデを施す。底部調整は外面に板を当てて行うが、通常観察できるように倒立した状態で行うのではなく、正位置で行っている。23は2段目以上にタテハケがあり、ヘラ状工具のナデの後、ハケを施している。22は2段目も基部と同様にヘラ状工具によるナデを施す。F類については、底部調整を行っているものの、正位置の状態で行う点、調整技法等から形象埴輪の基台になる可能性が高い。

口縁部（第3図 24～28）2号墳出土の円筒埴輪中、図化しうる口縁部は5点のみである。24は口縁部外面に幅広い突帯を有するもので、外面にタテハケ、内面にユビナデを施す。25・28は、外面タテハケ、内面ユビナデ、ナデ調整する。26・27は外面タテハケ、内面ユビナデ後タテハケを施す。

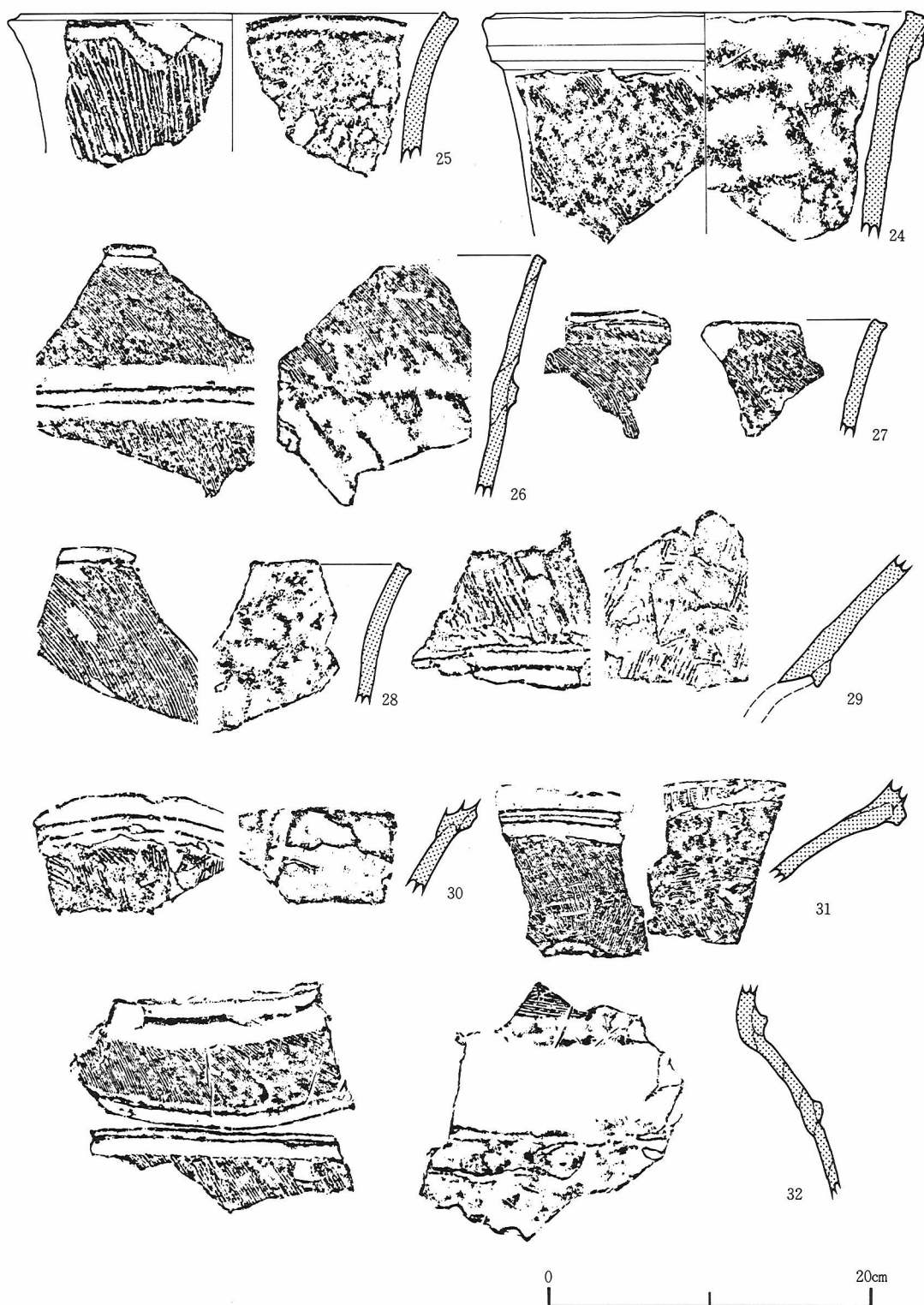
朝顔形埴輪（第3図 29～32）29～31は朝顔部の破片である。朝顔部は2段に屈曲して外上方に広がる形をとる。29は屈曲点で上部に粘土紐を直接に継ぐ方法をとる。30・31は、接合部



第1図 2号墳出土円筒埴輪



第2図 2号墳出土円筒埴輪



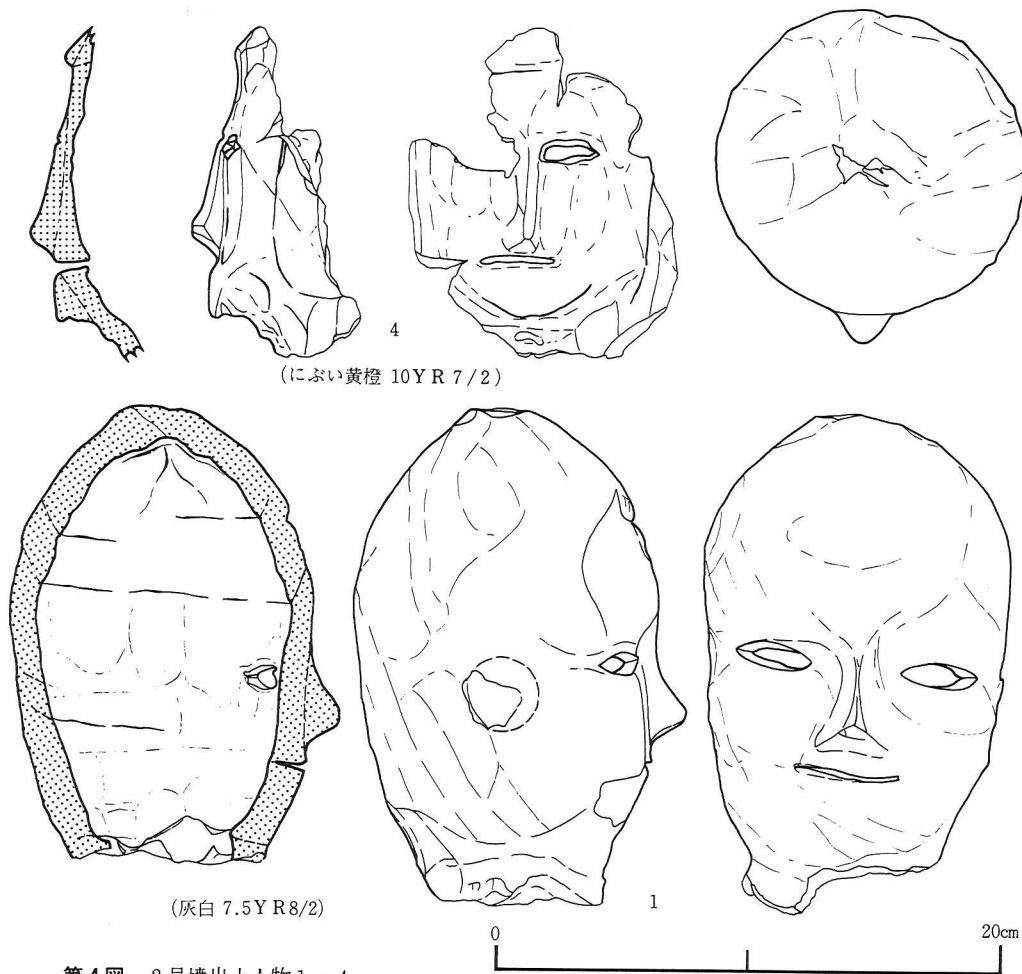
第3図 2号墳出土円筒埴輪・朝顔形埴輪

にハケ後、刻目を施し、接合する。外面の調整はタテハケ、内面はユビナデ（30）と、ハケ後ユビナデを施す（29・31）がある。32は肩部の破片である。比較的小形、薄手のもので外面はタテハケ、内面はくびれ部まではユビナデ、以上にヨコハケを施す。

人物埴輪（第4～6図）

人物1は、縦長の顔をもち、頭頂部が尖がり気味になる。鼻は比較的小さなつくりである。耳は丸い粘土板を貼り付けて表現する。頭髪表現はみられない。頸部より眼の上部まで粘土紐を積み上げて、内面を上部よりユビオサエあるいは横方向にユビナデする。その後上方に筒状に粘土紐を積み上げ、頭頂部をのぞき、ユビナデを施す。頭頂部は最後に筒状のものを絞り込み、頂部をふさぐ。したがって頭頂部内面にはシボリ痕が明瞭に残る。外面は、鼻、眼、口をつけたのち、強いユビナデを施す。顔面はユビナデの後ナデを施している。

人物2は1に比して小形の頭部である。眼と口は小さく、高い鼻を有する。頭部は、中央より左右に髪を振りわけ、左右、後頭部にたばねる。成形手法は1と殆ど同じで頭部を上部、下部の2段階に分けて成形する。頭頂部は完全にふさがず、不整形な孔を残して絞り込む。また、

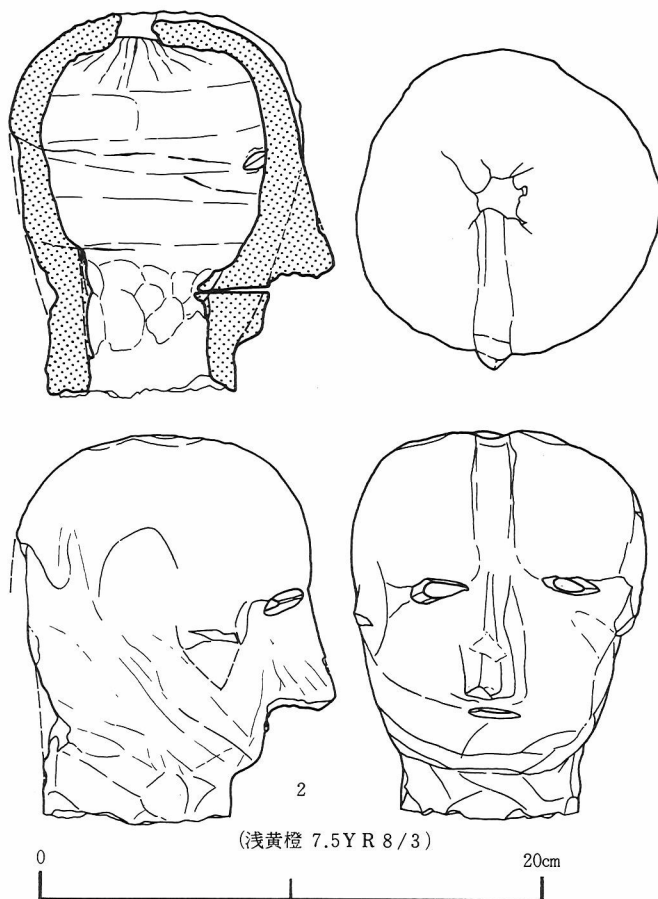


第4図 2号墳出土人物1・4

顎の部分は粘土紐を貼りつけて成形する。外面の調整は強いユビナデを施し、顔面のみナデを行う。

人物3は平坦な頭頂部に分銅形の剥離痕を残す点から、いわゆる島田髷風の髪形をもつ女性であろう。小形の頭部である。頭頂部には不整形な孔が残る。成形方法は1・2と同様であるが、顎の内面に粘土を継ぎ足し、接合部を補強する。外面の調整も同様に、強いユビナデを施す。耳の表現はない。

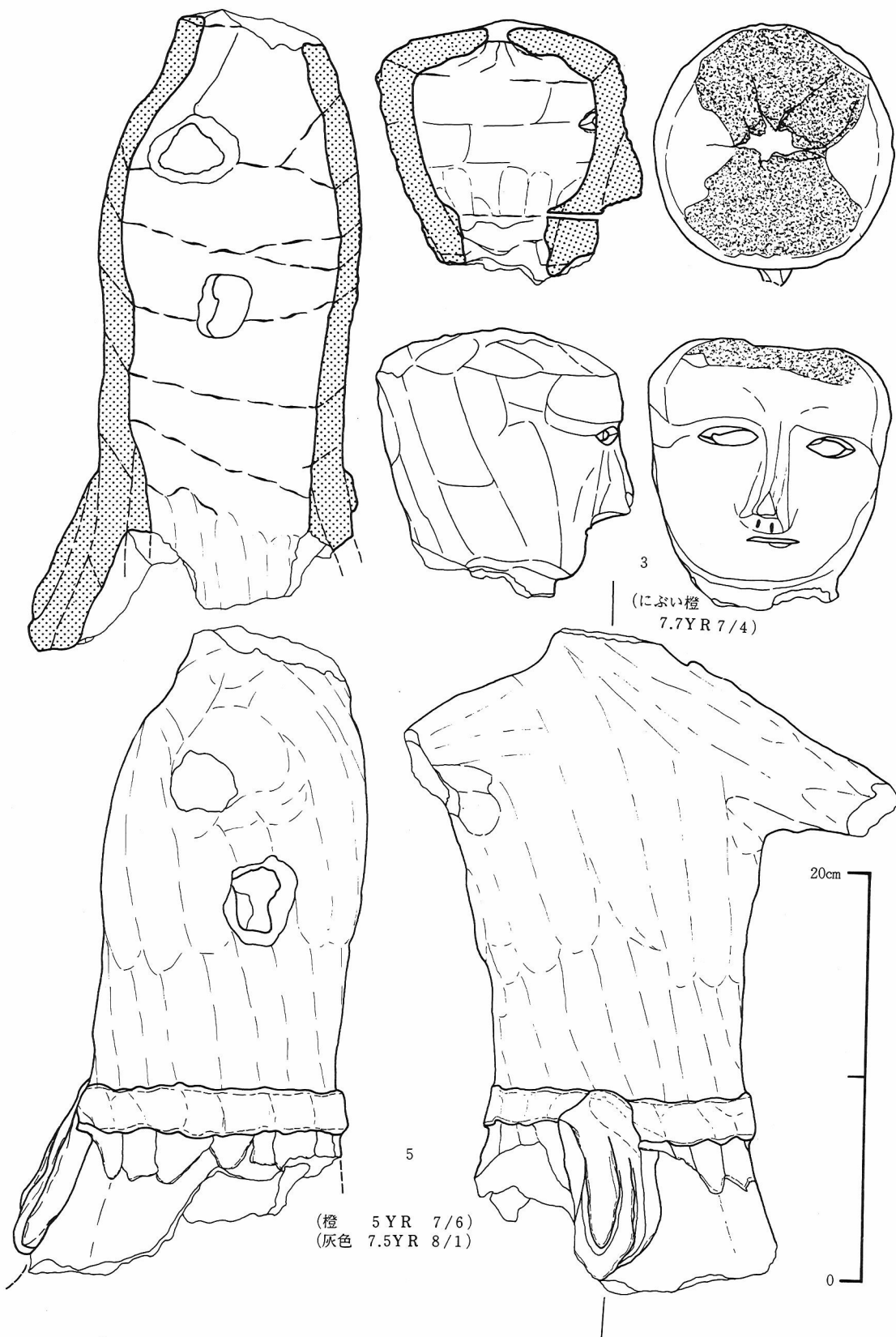
人物4は平面的な顔面をもつ人物である。顎の張った、小さな鼻のつくりである。額に粘土を貼りつけて段をつくっているのは、前髪の表現であろうか。製作手法は他の人



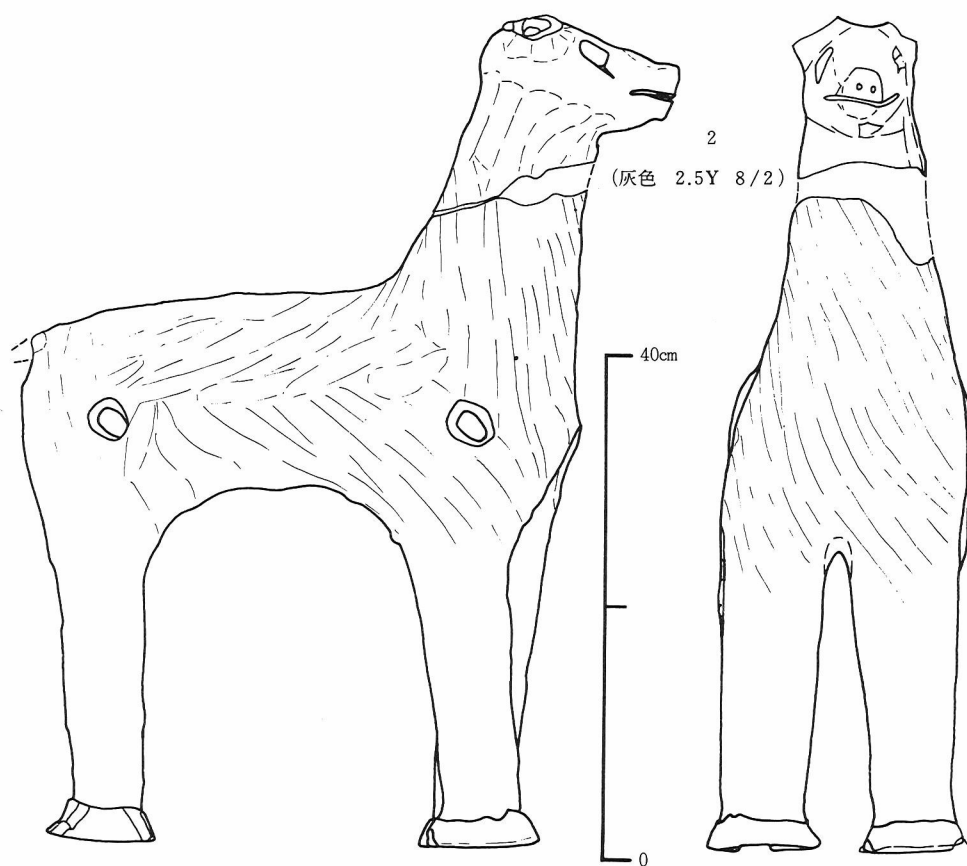
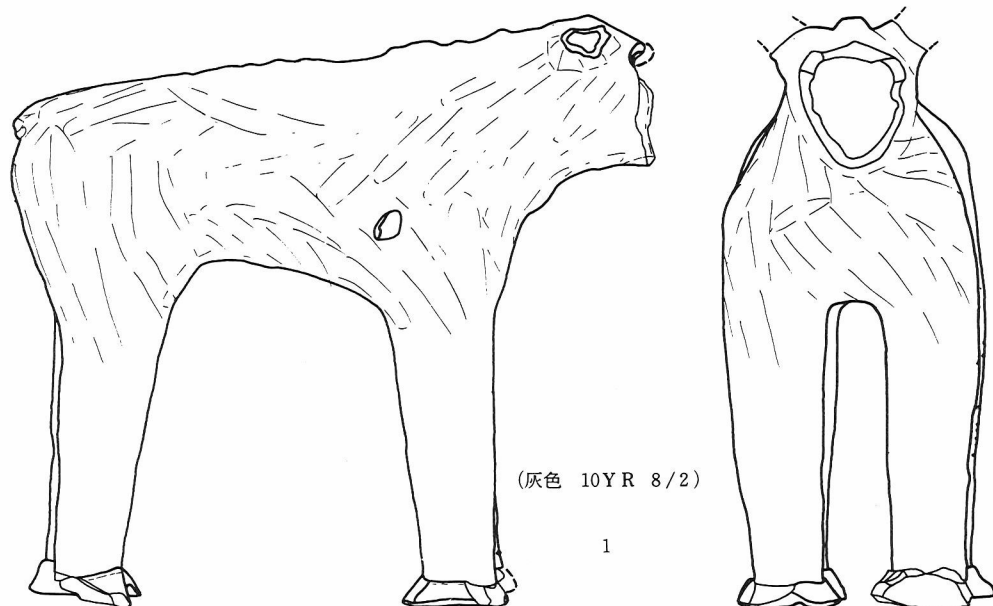
第5図 2号墳出土人物2

物と異なり、粘土紐を輪状に積み上げるのではなく、顔面を1枚の粘土板でつくり、顎部に接合する。その際に、接合部を縦方向の粘土紐を貼りつけて補強する。また、額と顎に粘土を貼りつけて成形する。眼、口は粘土があまり乾燥していない状態で現わされたとみえ、内面に粘土のはみ出しが顕著に残る。外面の調整は顔面にユビナデの後丁寧なナデを施す。顎部および側頭部はユビナデである。内面はユビオサエが顕著に認められる。畿内には少ないが、盾持ち人の顔面に近いと考えられる。

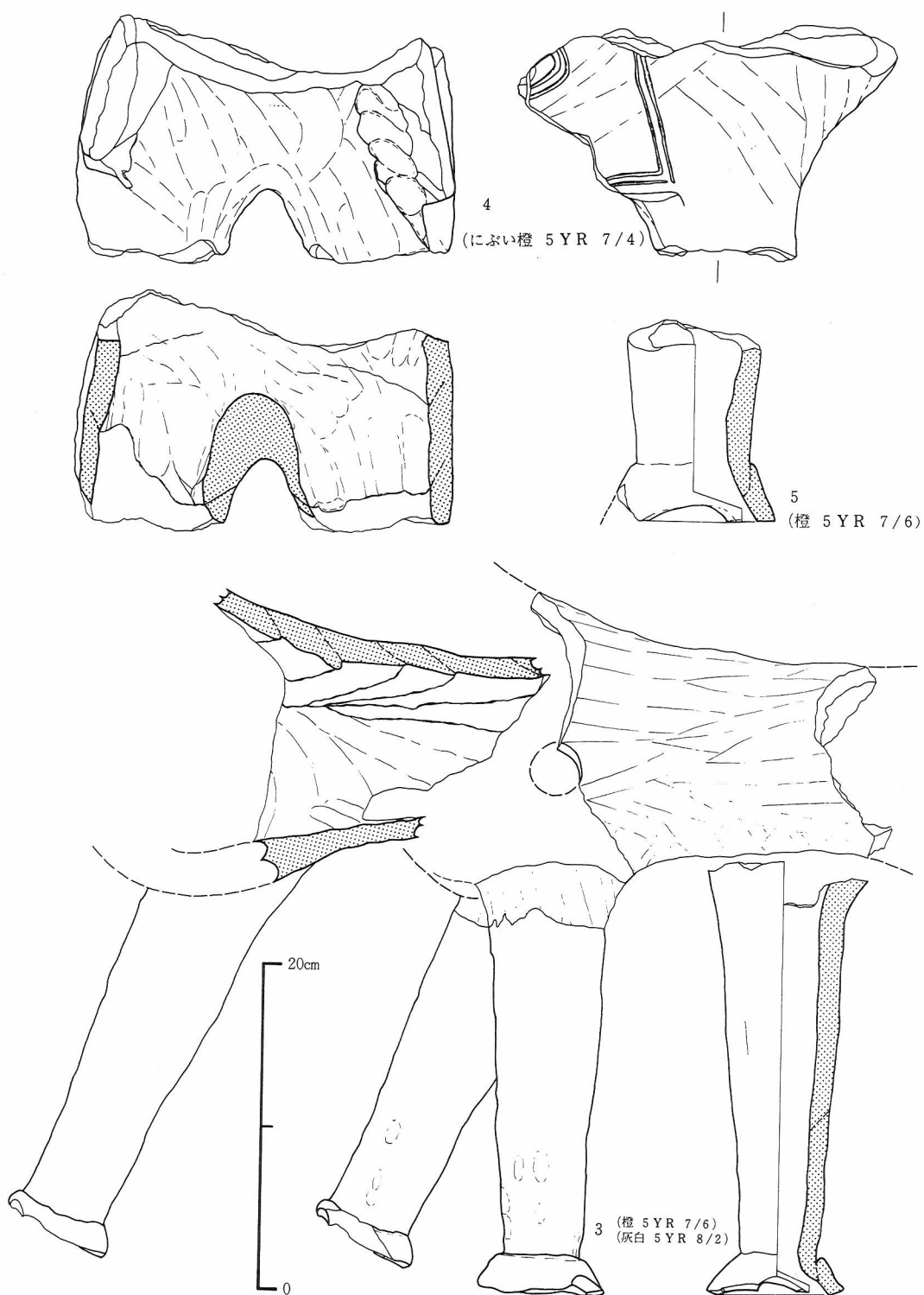
人物5は胴部の破片である。頭部、腕、下半身は欠損している。腰に帯をしめ、前で結ぶ。衣服の表現は他にはみられない。脚部は欠損しているが、円筒形の基台と考えられる。両脇に不整円形のスカシをもつ。成形は、まず円筒部をつくり、上端に衣服の裾部をスカート状に粘土紐を使用して貼り付ける。その後胸部までを粘土紐を輪積みする。肩部は横長の粘土板を前部、後部に貼り付け、先端を腕としてしぼり込み、顎部を丸く開けた状態で貼り合わせている。両腕の付け根の部分は、特に脇のみ粘土紐を貼り補強する。帯は胴部の外面調整が済んだのちに貼り付ける。調整は、基部内面は縦方向のユビナデ、胴部・両腕外面は板状工具による強い縦方向のナデ、ユビナデを施す。胴部内面は、大部分が成形時のユビオサエのみで終わっており、



第6図 2号墳出土人物 3・5



第7図 2号墳出土動物1・2



第8図 2号墳出土動物3・4・5

一部にユビナデを施す。

動物埴輪（第7～9図）

1は猪である。顔の部分は欠損している。背にタテガミ状の表現のある事から猪であろう。脚は4本とも爪が表現されており、前方に半円形のえぐりを入れて、かなり写実的である。前脚の付け根には一対の不整円形のスカシがある。製作技法はまず脚をつくり、胴部の粘土の重量に耐える程度に乾燥させる。そして胴部下半を粘土紐を前後に長く使用して脚部と接合しながら形づくる。胴部上半はこの後、尻部より頭部に向って粘土紐を丸く山形に貼り付けていく。頭部は鼻の部分をのぞき胴部より一気につくる。耳および背の表現は粘土を貼り付けて成形する。最後に脚部を除いて全体に強いユビナデを施す。脚部については、幅広の粘土板で筒状のものを2段に接合し、爪の部分に粘土紐を巻く、外面には脚部製作時のユビオサエの痕跡と、内面にしぼり痕のみが観察できる。乾燥の度合が異なるため、胴部にみられるユビナデ調整は脚部に及ばない。

2は鹿である。角の表現はない。脚端に1と同様の爪の表現がある。半円形のえぐりは、前方にはなく、横方向あるいは後方と不揃いである。前後脚の付け根に計4個の不整円形のスカシをもつ。製作技法は1と全く変わらず、調整技法も外面に強いヨコナデの痕跡が残るなど、同じものである。

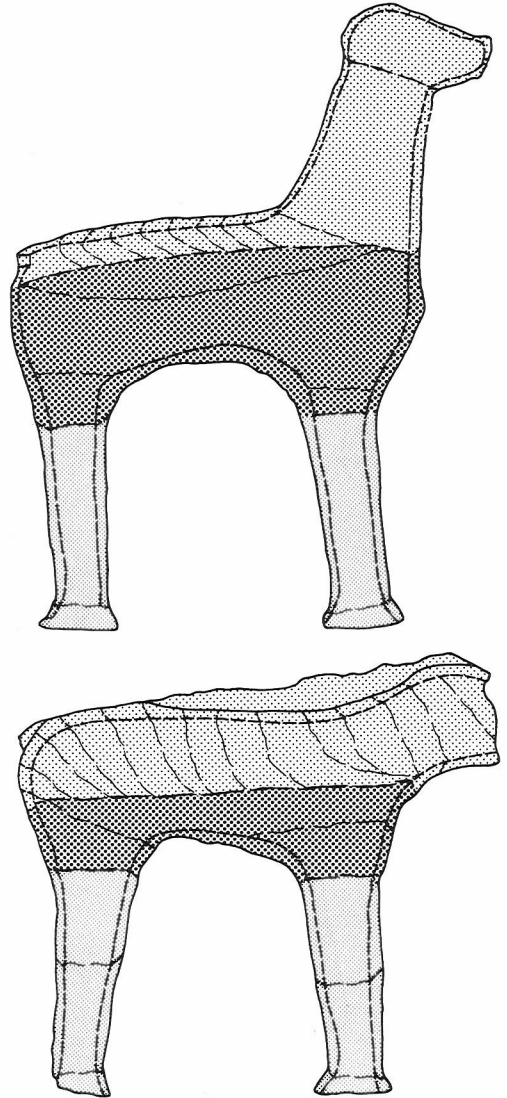
3は前足の部分である。1・2と異なり、動きのある形をとる非常に類例の少ないものである。種類は不明であるが、背と爪の表現から鹿になる可能性がある。

4は後脚の付け根にあたる部分と思われる。側面に粘土板を貼り付け、直線と円形のヘラ状工具による刻線をもつ。類例がないため不明であるが、馬の鞍を表現したものではなかろうか。左側面に円形のスカシをもつ。製作技法、調整等は1～3と同様である。

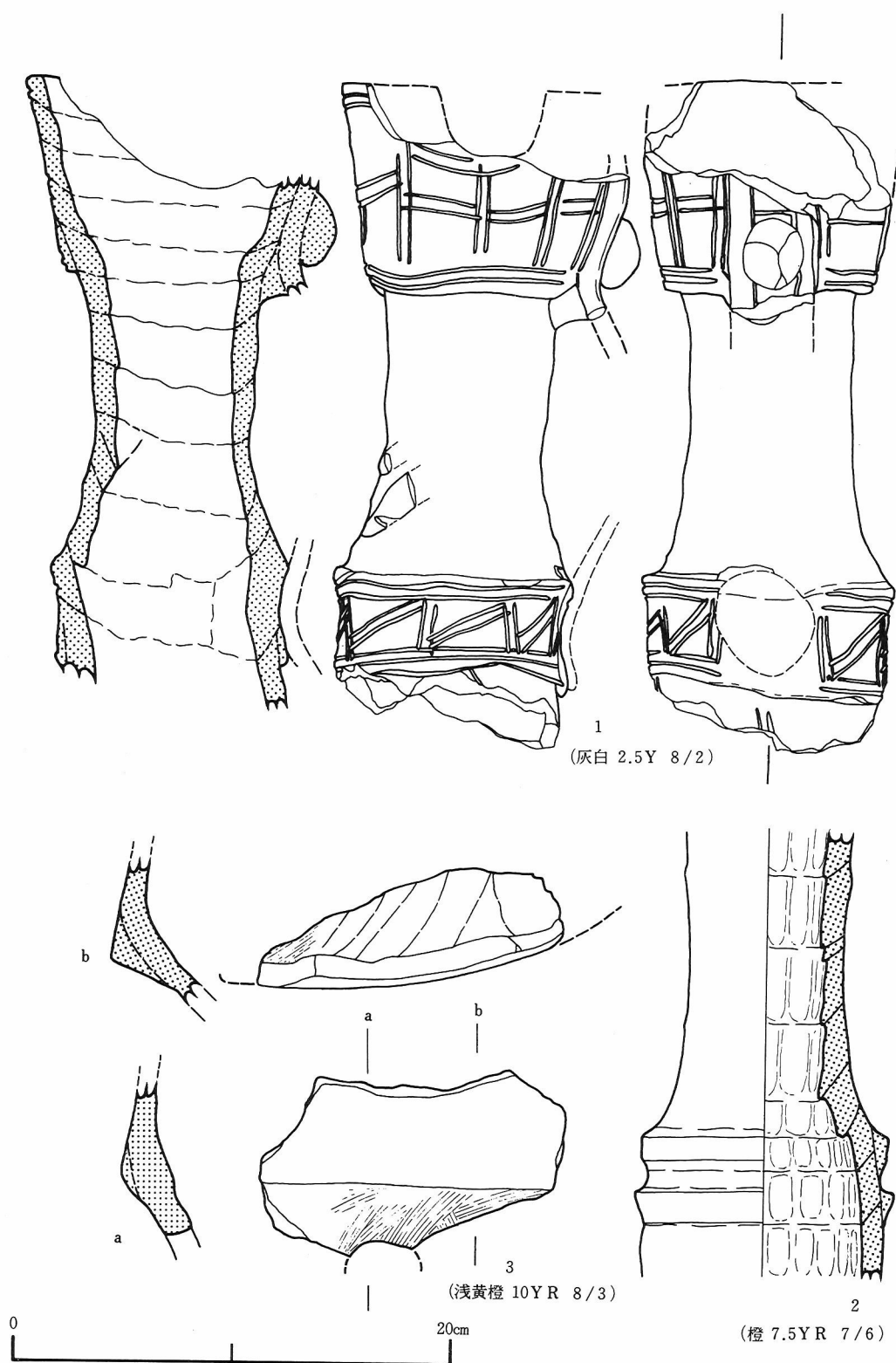
器財形埴輪（第10図）

器財形埴輪には、太刀、盾、衣蓋がある。

太刀1は勾金を有する飾太刀の把部である。把頭にヘラ状工具による刻線を格子状に施す。



第9図 2号埴出土動物1・2断面模式図



第10图 2号出土太刀・1・2・3

把縁には方形に区画された中に2条の刻線を対角線状に施す。勾金は幅4.2cmで把頭、把縁に玉で留めた形を表す。勾金表面に格子状の刻線が認められる。把頭には、半円形のえぐりが残る。把間に粘土紐を貼り付けたものがあるが、指の表現であろうか。製作技法は粘土紐の積み上げのみで、内面をユビオサエ、外面を丁寧ナデ調整する。刻線は勾金をつけた後に行う。勾金の取り付け部は、粘土補強する。

太刀2は1と同一個体になる可能性がある。下半にある2条の突帯は、責金具あるいは鞘尾金物の表現であろうか。粘土紐を積み上げ、内面ユビオサエ、外面ナデ、突帯部は円筒埴輪の突帯と同様のヨコナデで調整する。1・2ともにほぼ正円の断面を示す。

3は把頭の破片と思われる。王纏太刀の把頭部のみを模倣したものと考えられる。把間の上部にあたると思われる部分の側面には円形のスカシがあり、目針穴よりきたものであろうか。

盾形埴輪（第11～13図）

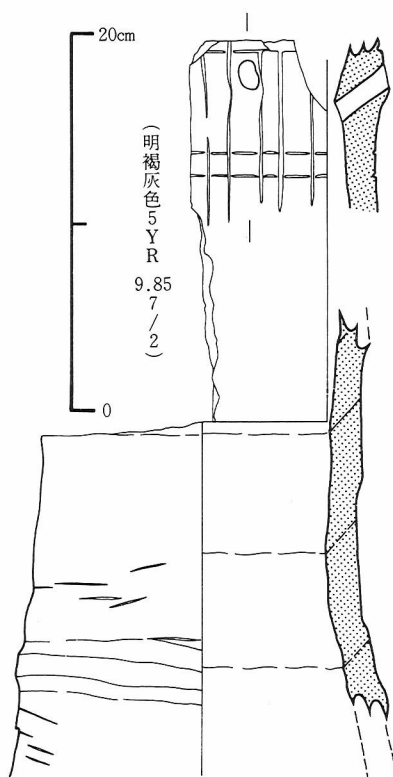
1・2は円筒形の基部から盾面下半の破片である。盾面には下端と側縁部に2条の刻線を持ち、中央に半円形の刻線を刻む。2号墳出土の盾は全て円筒形の側面に鱗状に粘土をたし、盾面としたもので、外面を強いユビナデ調整、内面をユビナデ、ユビオサエする。3は基部に退化した低い突帯を持ち、基部外面は板状工具による叩き、内面はユビナデ調整する。

小結

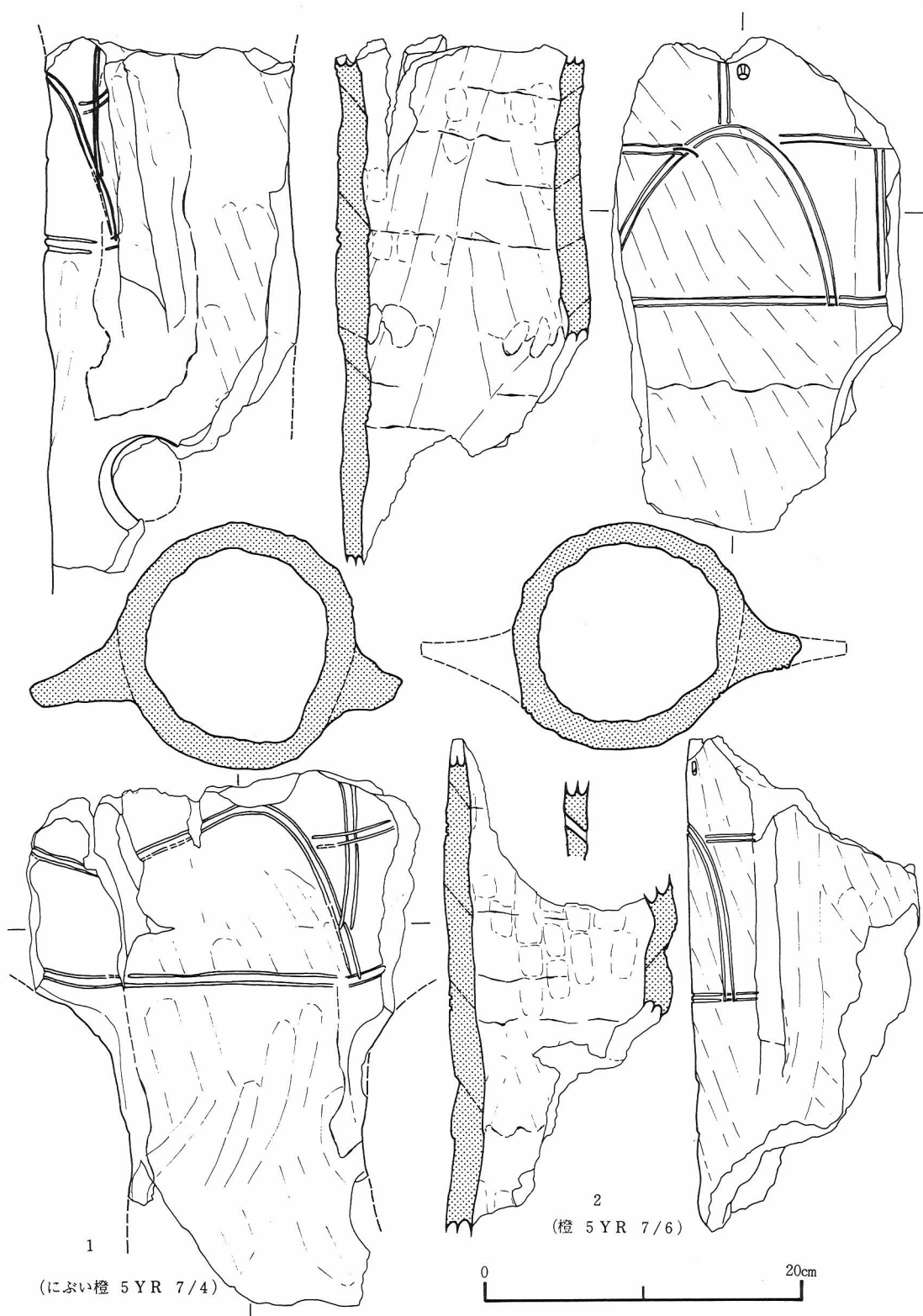
以上の観察より各埴輪の製作技法、あるいは調整技法の共通点を考えたい。まず、人物では、外面のユビナデ調整がある。ユビナデ調整は、顎、頭頂部、側・後頭部に明瞭に残っており、胴部は特に顕著である。製作技法では、人物頭部を製作する際、顎部より眼の上部まで粘土紐を積み上げて、この後ヨコナデ、ナデを施し、上部は筒状に積み上げて、上端を絞り込む。このため、頭頂部内面にはシボリ痕が残る。また、上部の内面は粘土紐の継ぎ目が下半部に比して明瞭である。顎の部分、顎部内面は、1を除いて粘土で補強する。頭部製作の初段階は1のように卵形を呈し、のちに各部位を付け足した事が推察できる。

動物では、外面のヨコナデ調整は人物と同様に明瞭に観察できる。製作に際しては、脚、胴部下半、上半・頸部、頭部の大きく4分割で製作された事がうかがわれる。また爪の表現も同形態をとっている。

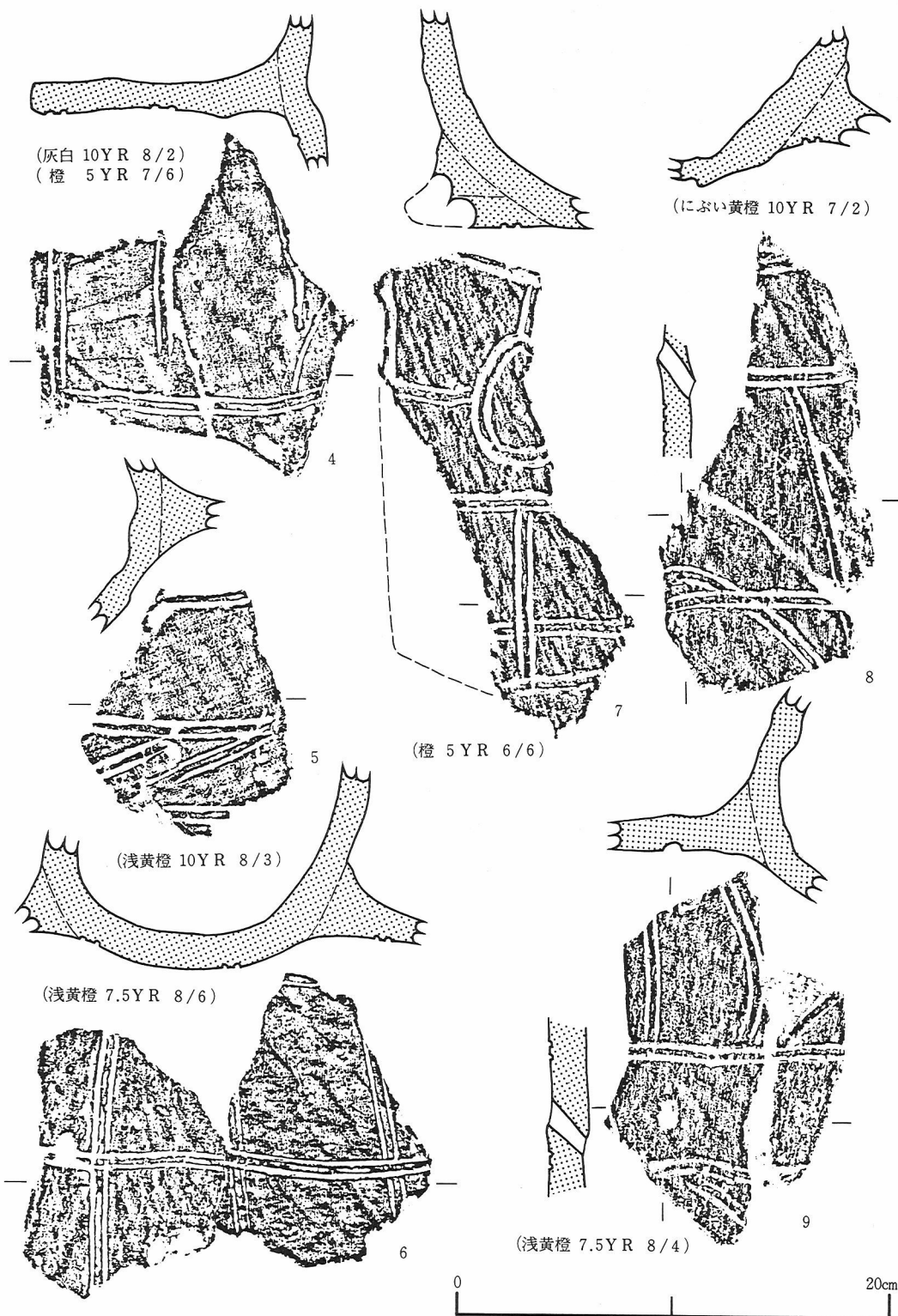
形象埴輪全体に共通する点は、外面調整に強いユビナデを用いることといえる。この手法は、同筒埴輪のF類の基部、および2段目にみられるユビナデ、もしくはヘラ状工具によるナデと



第11図 2号墳出土盾3



第12図 2号墳出土盾1・2



第13図 2号墳出土土盾 4～9

類似している。しかしながら、円筒埴輪F類は形象埴輪の基部になる可能性も考えられる。円筒埴輪F類は、底部調整を行い、外面タテハケ、内面ユビナデを行っている点から、基部の外面調整を除き、他の円筒埴輪との差異は認められない。したがって、円筒埴輪、形象埴輪間には手法上の共通点があるといえよう。

Ⅲ 3号墳出土の埴輪

3号墳出土の埴輪には、円筒埴輪、朝顔形埴輪、人物埴輪、動物埴輪、器材形埴輪が認められる。また、図化できなかった中に家形および馬具があり、鞍金具をつけた馬があったと推定できる。

円筒埴輪（第14～16図）

3号墳出土の円筒埴輪は、大半が口縁部である。口縁部は形態と調整法により5類（A～E）、底部は4類（F～I）に分類した。A類（第14図 1～9）は口径16.0～21.6cmを測る比較的大型のもので、わずかに口縁が外上方へ広がり、口縁端部は平坦、もしくはわずかにくぼむ。外面をタテハケ、内面をユビナデ調整し、口縁部端面および内外面をヨコナデする。突帯は1が断面三角形、2・3が退化した低い台形を呈する。非常に焼きの堅い灰色を呈するものである。9は他に比して大きく外上方へひらく口縁部形態をとる。

B類（第14図10～15）はA類に比して口縁部がわずかに外反し、端部は明瞭な平坦面をもたない。外面はタテハケ、内面はユビナデ調整し、端部をヨコナデする。11はこのヨコナデが強く施され、端部が外上方へ引き出されている。

C類（第15図 16～24）は外面に粗いタテハケを施し、口縁部端面にヨコナデによる浅い凹部を有する一群である。口縁部の形態は外上方へ広がり、端部は明瞭な稜線をもつ。内面はユビナデ、口縁端部はヨコナデ調整する。23は外面に窯印をタテハケ後に刻む。

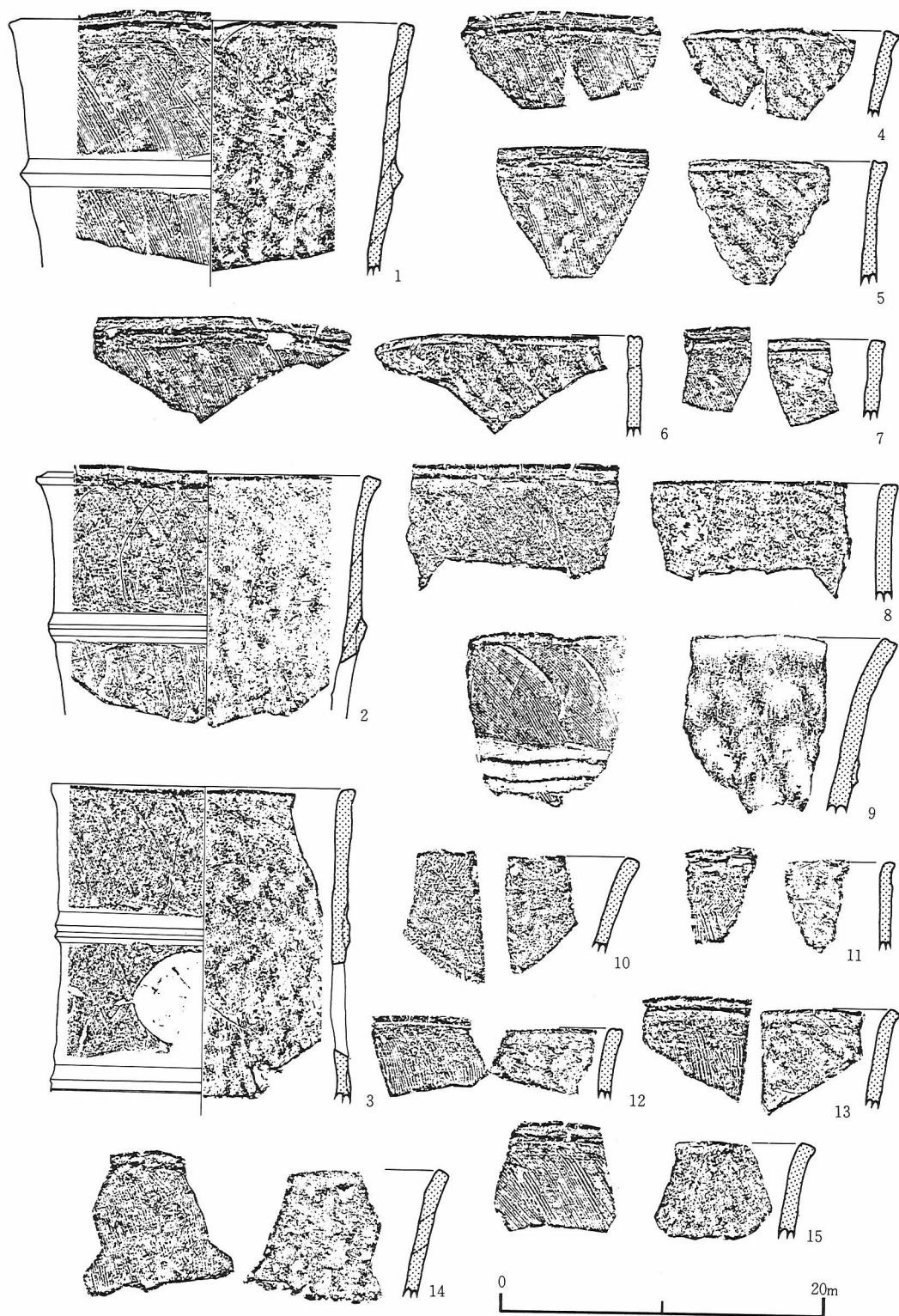
D類（第15図25～28）は外上方へ広がる口縁部から、内外面の調整後、口縁端部付近のヨコナデによって端部がわずかに外反する一群である。28はC類24と同じ窯印をもつ。

E類（第15図29～32）は直立気味の口縁部をもち、端部が外方へ肥厚する一群である。外面は非常に細かいタテハケを施し、内面はユビナデ後、口縁部より下半約5cmをナデ調整する。30は最上段の突帯が残るもので退化した低い台形を呈し、上下をヘラで押圧した後にヨコナデする。

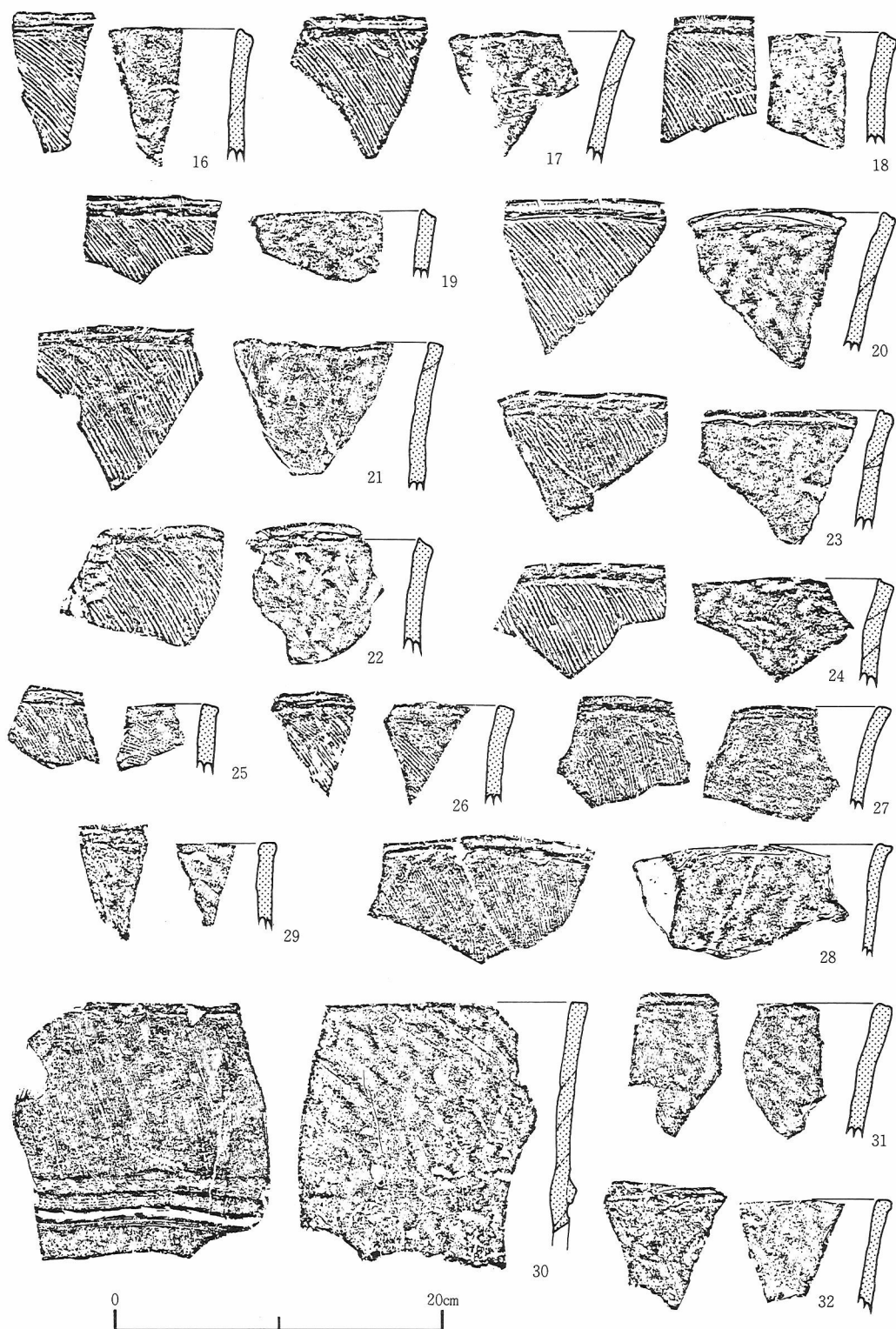
F類（第16図33）は1点のみである。底径15.4cm、基部の高さ6.5cmで、口縁部があまり広がらないと予想されるものである。外面はタテハケ、内面ユビナデ調整する。底部調整は外面に板を当てて行う。突帯は退化して低い台形を呈す。2段目に円形のスカシを有する。

G類（第16図34～37）は底部調整技法に板状工具によるタタキを用いる一群である。外面はタテハケ、内面はユビナデ調整する。底部調整は埴輪を倒立させ、内面に指を当てて外面の基部下半部を板状工具によって叩く。そのため、タテハケは完全に消されている。突帯は低い台形を呈し、2段目以上に円形のスカシを有する。

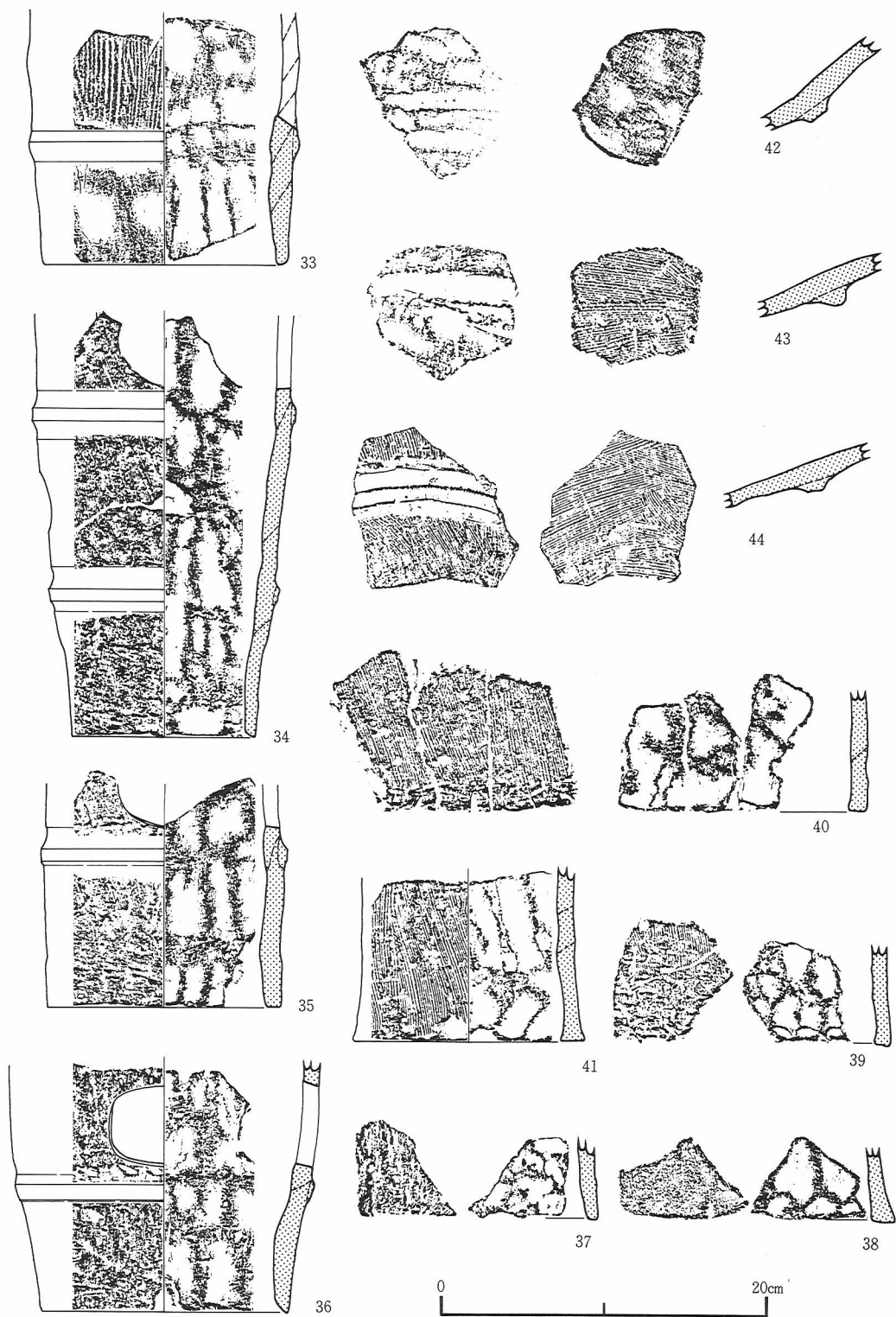
H類（第16図38・39）は外面タテハケ、内面ユビナデ調整を施し、底部調整を外面に板を当



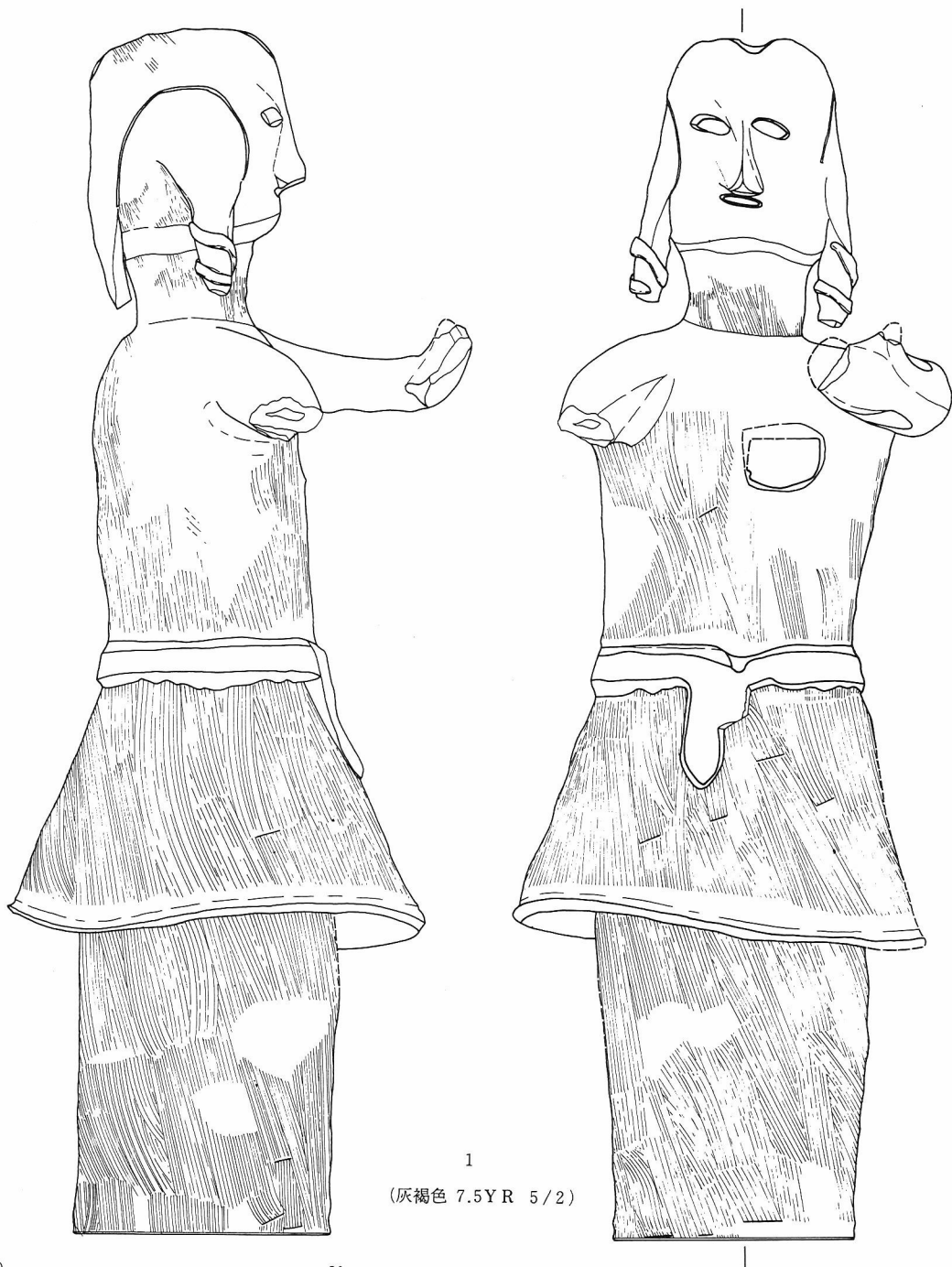
第14図 3号墳出土円筒埴輪



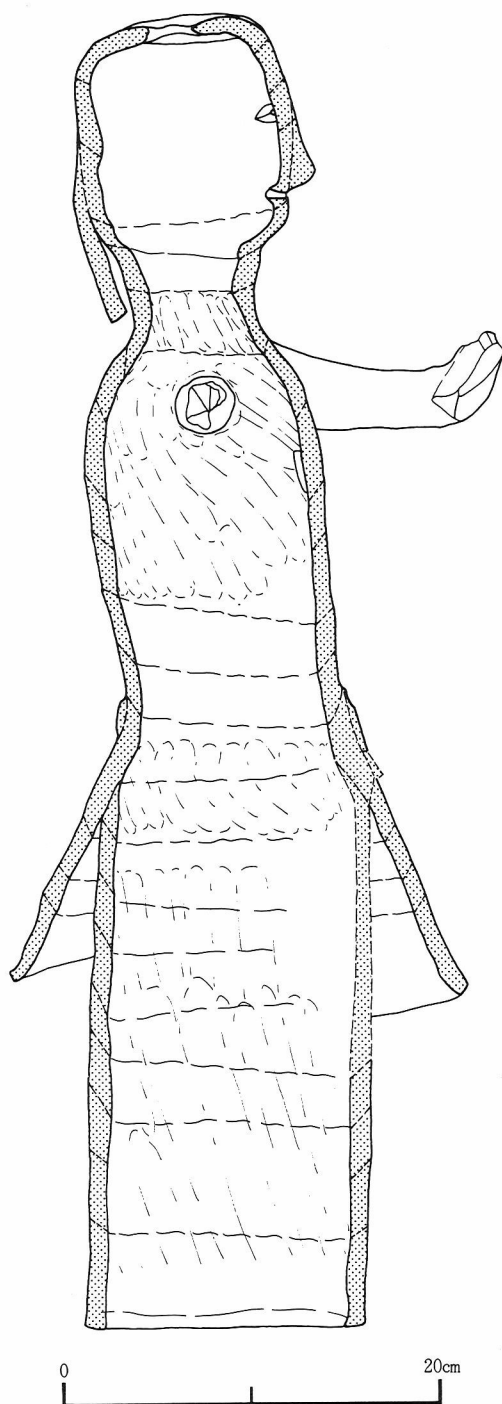
第15図 3号墳出土円筒埴輪



第16図 3号墳出土円筒埴輪・朝顔形埴輪



第17図 3号墳出土人物1



第18図 人物1断面

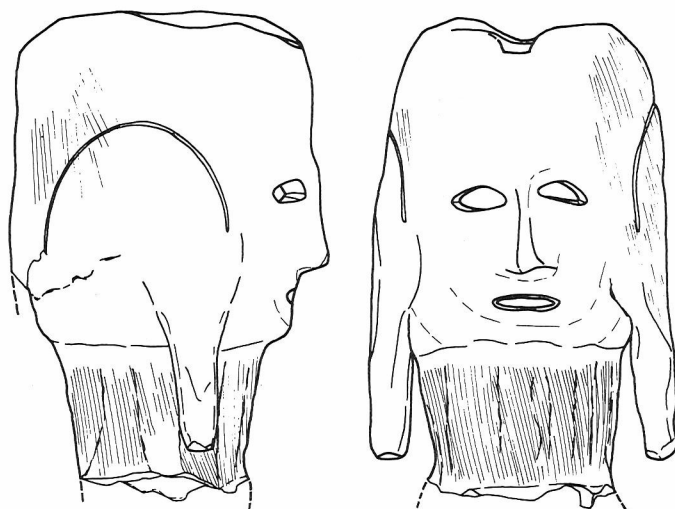
てて行うものである。

I類(第16図40・41)は直立気味に立ち上がる基部である。外面タテハケ、内面ユビナデ調整を施す。底部調整は内面をユビオサエする。外面に板を当てたものと思われるが、痕跡は明瞭ではない。底径14cm前後を測り、比較的小形のものであるにもかかわらず、1段目の突帯まで11cm以上となる例は3号墳の円筒埴輪には無く、形象埴輪の基部になる可能性が考えられる。

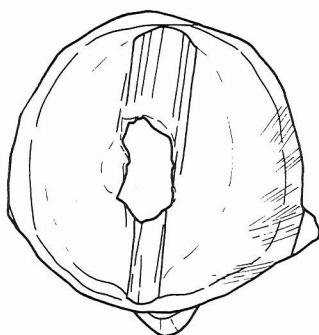
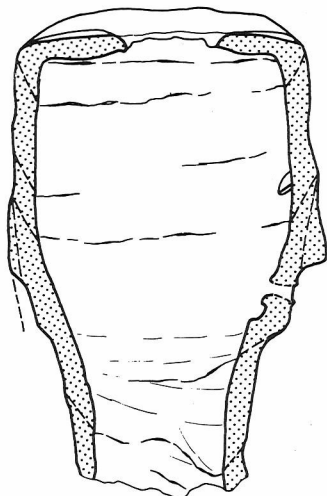
人物埴輪(第17～23図)

人物1については、既に報告したが、今回製作技法の点から改めて紹介する。下半身は両足の表現をせずに円筒形の基部としている。この基部は円筒埴輪と同様の技法を用いるが、突帯はない。基部は外面タテハケ、内面ユビナデ調整を施すが、底部調整として内面ユビオサエする。外面は板を当てたと考えられるが、痕跡は殆んど残っていない。また、底面の粘土のはみ出しは底部調整を行うものの、非常に少ない。外面のタテハケは、底面際まで続いており、底面をヘラ切りした後に粘土のはみ出しをさらに調整した可能性が考えられる。この形態は、円筒I類と類似している。

このように粘土のはみ出しが少ない事と底部調整を行う点から、上半部を接合する段階ですでに基部はかなり乾燥が進んだ状態と考えられる。胴部はこの基部より粘土紐を積み上げ、肩部までを成形する。内面は丁寧な縦方向のユビナデによって、粘土紐の痕跡が消されている。この段階で両腕を接合し、接合部外側に粘土を貼り付けて補強する。両腕は基部と同様にかなり乾燥した状態で接合されている。頸部内面は、



2 (橙 2.5YR 7/6)
(浅黄橙 7.5 YR 8/4)



第19図 3号墳出土人物2

は頭頂部を粘土板でふさぎ、中央に孔の残る形をとると思われる。成形は人物1・2と同様で、内面は丁寧な横方向のユビナデ、顔面内部のみ縦方向のユビナデを施す。外面はナデ調整する。

人物5は、美豆良をもつ人物である。頭部にめぐる刻線は入墨の表現であろうか。成形、調整技法は他と同様である。

人物6は、後頭部、右側頭部の破片である。頭髮は耳を覆い、耳の下付近でそろえる。後方のみ髪を束ねて下方へ垂れる形をとる。成形技法は、粘土紐の輪積みであるが、内面下半を横方向、上半を縦方向の強いユビナデ調整をするため、接合痕が殆んど消失する。外面は顔面をナデ、頭髮部を主としてタテハケ、頸部をタテハケ調整する。

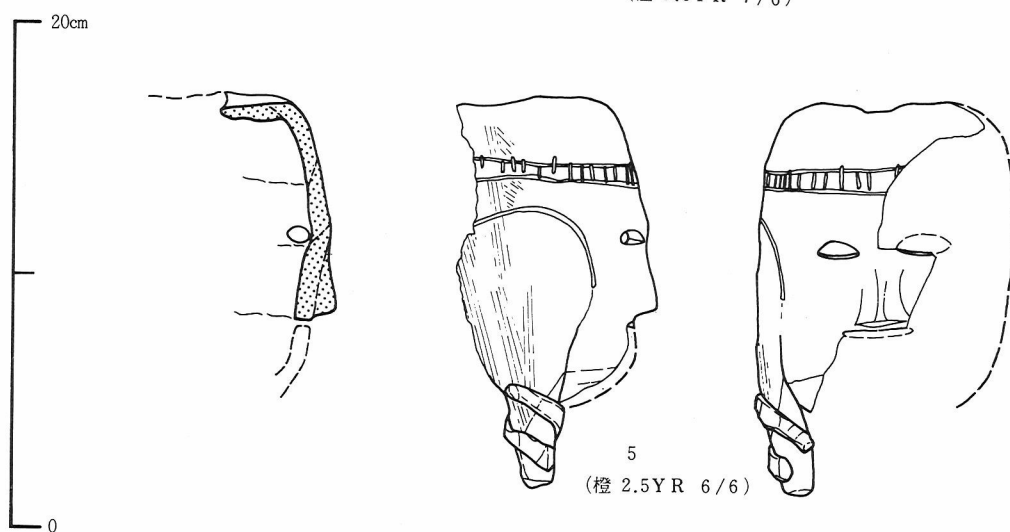
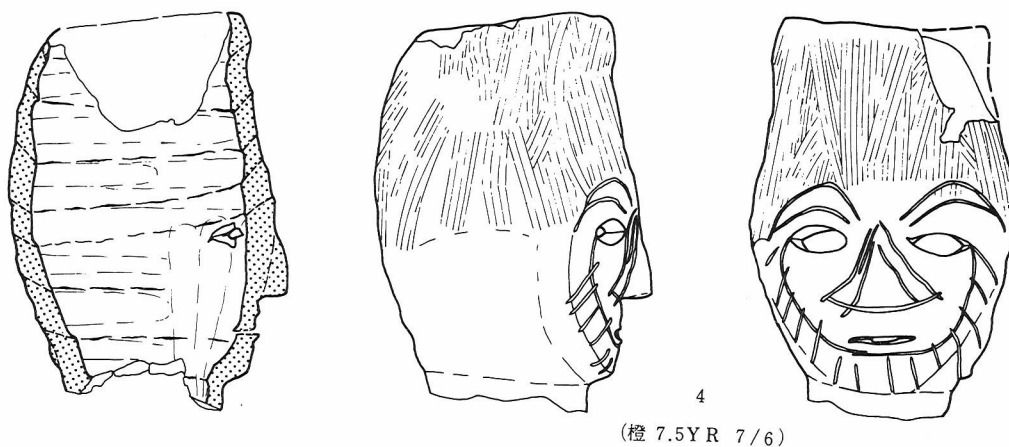
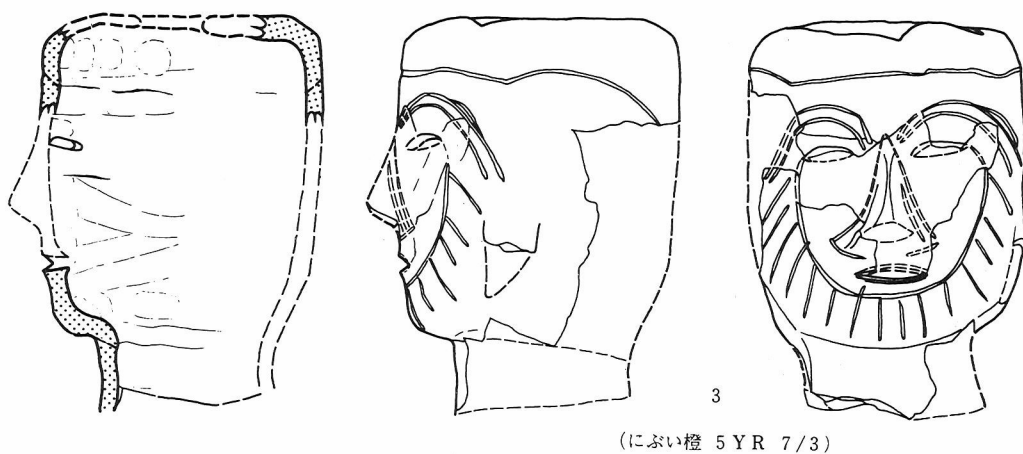
人物7は女性の埴輪である。頭髮を前後に大きく結び、中央で束ねた形をとる。耳は小さい円形の孔として表現する。成形は粘土紐の輪積みであるが内面調整が縦方向の丁寧なユビナデの

中位まで縦方向のユビナデを施す。中位以上は、頭部成形と一体となり、粘土紐による輪積みで成形し、内面は横方向の丁寧なユビナデを施す。顔面部内面については、さらに縦方向のナデが一部に認められる。頭頂部は粘土板を貼り付ける。頭部外面はハケの後丁寧なナデを施す。頸部、胴部は全体にタテハケを施す。

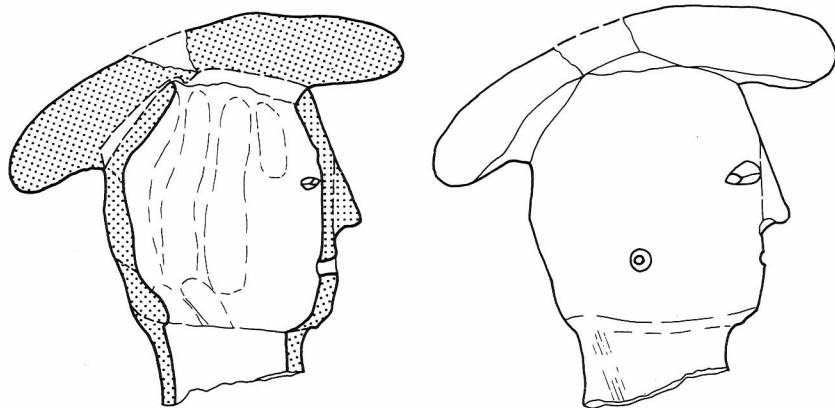
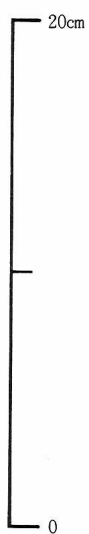
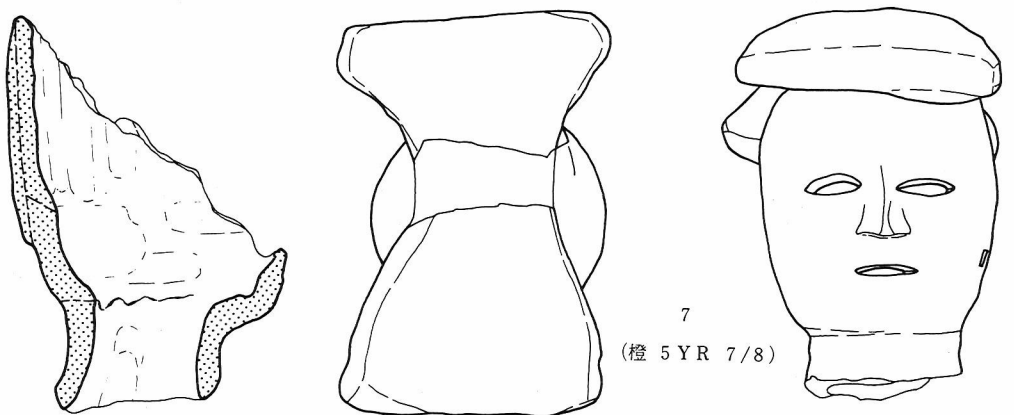
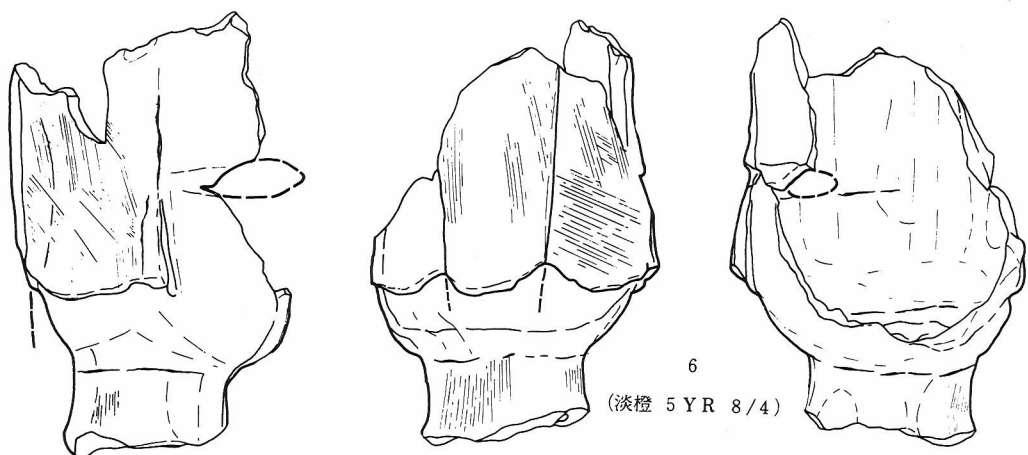
人物2は人物1と同形態のものである。頭頂部は板状の工具で叩き、溝状の凹部とする。内面の調整は1と同様に丁寧に粘土紐の接合痕が不明瞭である。

人物3・4は顔面に入墨をもつものである。4は頭髮を上方へ束ねた形をとり、頂部が円筒形となる。粘土紐を輪積みし、内面は横方向のユビナデを施す。外面は上部をタテハケ調整し、頭髮を表現する。

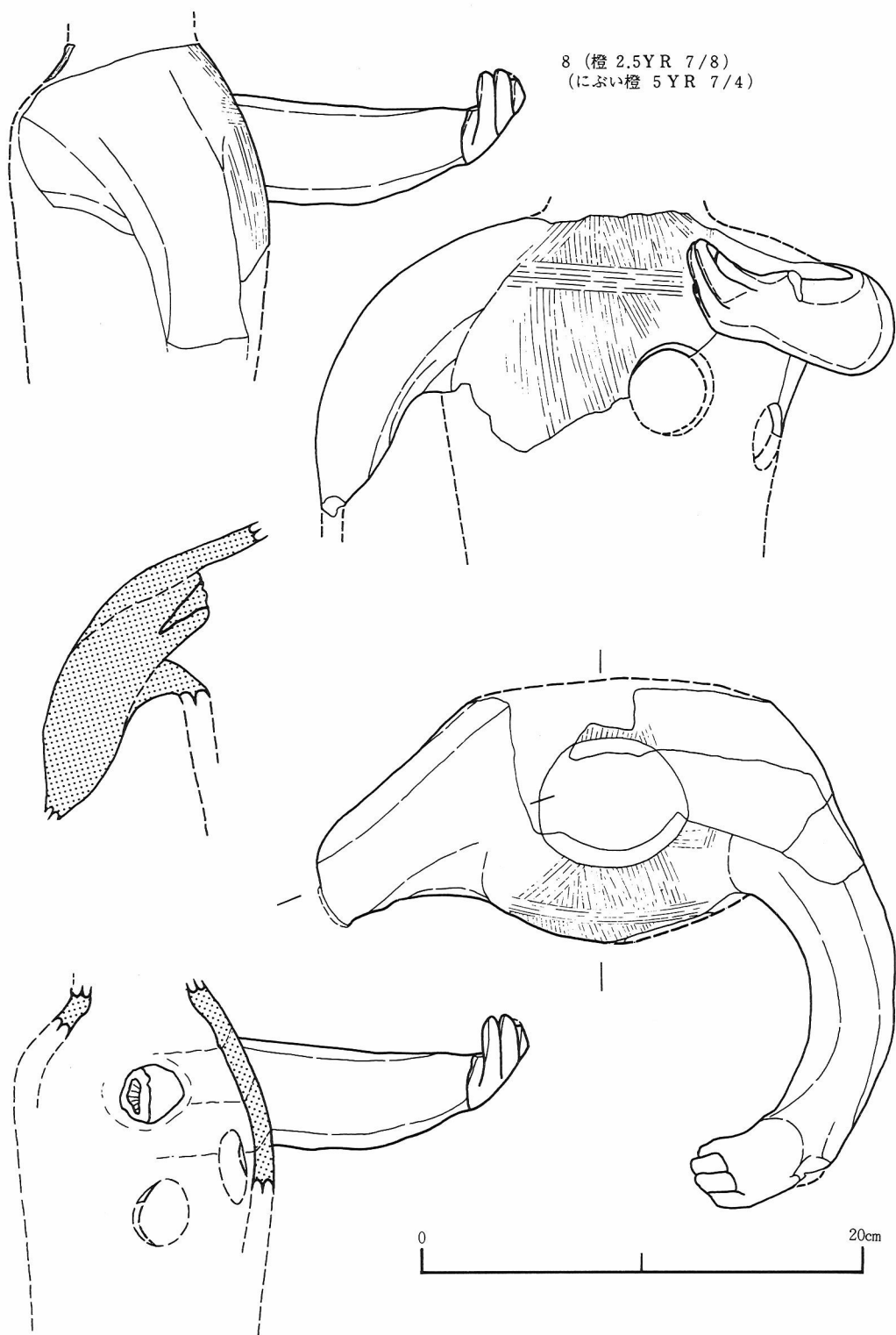
下半は丁寧なナデを施す。3



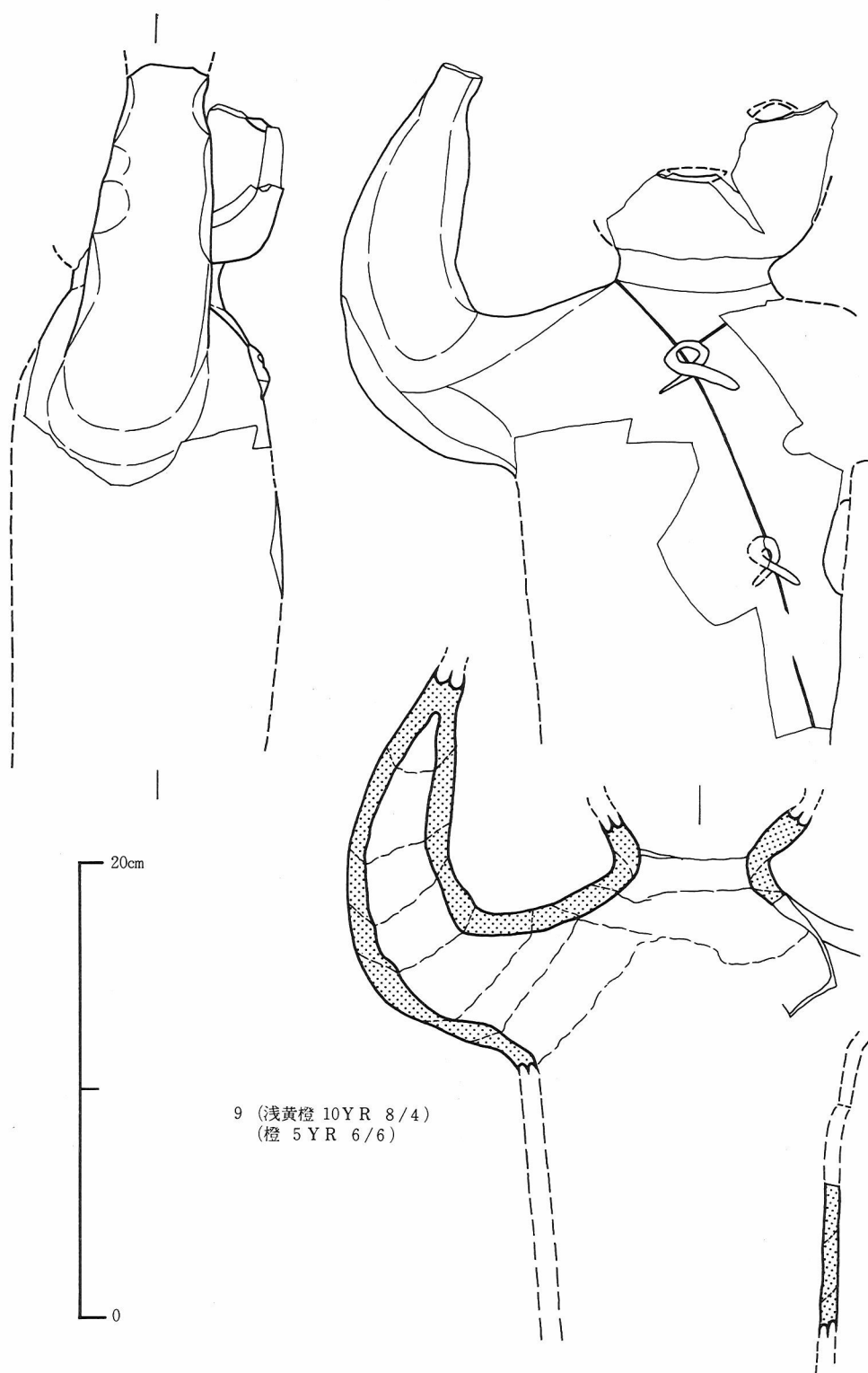
第20図 3号墳出土人物3～5



第21图 3号墳出土人物6・7



第22図 3号墳出土人物8



第23图 3号填出土人物9

ため、接合痕は不明瞭である。頭頂部は不整形な孔をなし、頭髮部を接合するために周囲にヘラで溝を刻む。府下で出土例の多い巫女に類似する⁽⁶⁾

人物8は人物1と同形態の胴上半である。左胸に円形のスカシをもつ、成形技法は肩部まで粘土紐の輪積みをし、乾燥させた両腕を接合する。両腕接合時に外面に粘土を貼り付けて補強する。内面の調整は不明瞭であるが、縦方向のユビナデを施す。外面は両腕を接合したのち胸部付近をハケ、両腕の接合部をナデ調整する。

人物9は上衣を表わした胴部上半である。上衣は右肩から左腰部に向って1条のヘラによる刻線と、線上に2ヶ所の粘土紐を貼り付けて結束部を表現する。上部の結束部より左肩に向って1条の刻線があるところから、垂領の右衽の形と考えられる。製作技法としては、胴部は粘土紐の輪積み、右腕は人物1のように組み合わせではなく、胴部からそのまま輪積みを延長させている。外面はナデ、内面はユビナデ調整する。

器財形埴輪

太刀（第24図）

中実の飾太刀である。1は柄部から鞘部、2は柄頭部、柄間の破片である。焼成・胎土・形態は類似している。外面はヘラ削りの後、ナデ調整し、明瞭なしのぎと思われる稜をもつ。

3は柄頭から柄間の部分である。1・2と比して軟質で、表面が磨滅しており、調整法は観察できない。

1・2は鹿角外装の太刀を模したものと考えられ、かなり簡略化され、形のみの模倣となっている。

短甲（第24図）

横矧板鋌留短甲を模したものである。残存した部分は、縦方向に走る2本の刻線が蝶番と引合の表現と考えられる点から、短甲の下半横側であろう。以前に報告した例と同形のものである。⁽⁷⁾

琴（第24図）

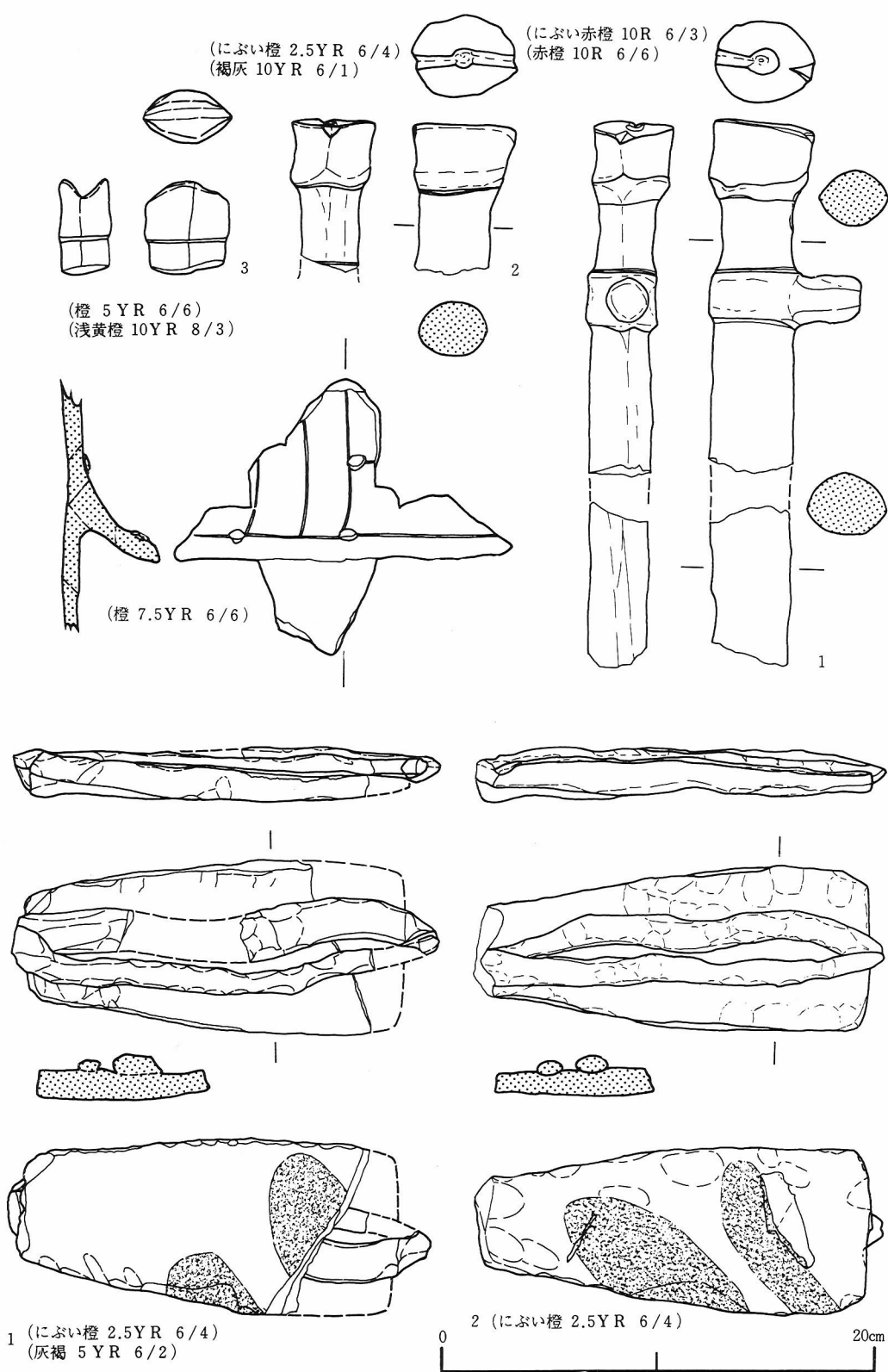
同形のもの2点が出土した。琴頭幅4.1cm、琴尾幅6.2cm、全長18.8cm、厚さ1.4cmを測る。絃は粘土紐を貼り付けた2絃である。絃孔、突起等の表現はない。板作りの琴を模したものであるが、絃数、形態等に簡略化されたことがうかがえる。裏面に剥離面が2ヶ所確認できる点から、人物埴輪に付随したものと考えられる。表面の調整はユビオサエ、ナデである。

盾（第25図）

盾上縁が弧状を呈するものである。盾面は鋸歯文を中心として、周囲に区画された2条の圏線をめぐらす。盾面を製作したのち、裏面に粘土を縦方向に貼り付けた痕跡が残る。一部に補強のための粘土を貼り付ける。外面はタテハケを全面に施す。内面はユビオサエ、ユビナデ調整する。

小結

3号墳の埴輪は削平された古墳の整地層内より出土したため、円筒埴輪の口縁部が多く、製作技法上の特徴が最もよく現われる底部が少ない等、全体をうかがう上で不十分な資料となっ



第24図 3号墳出土太刀・短甲・琴

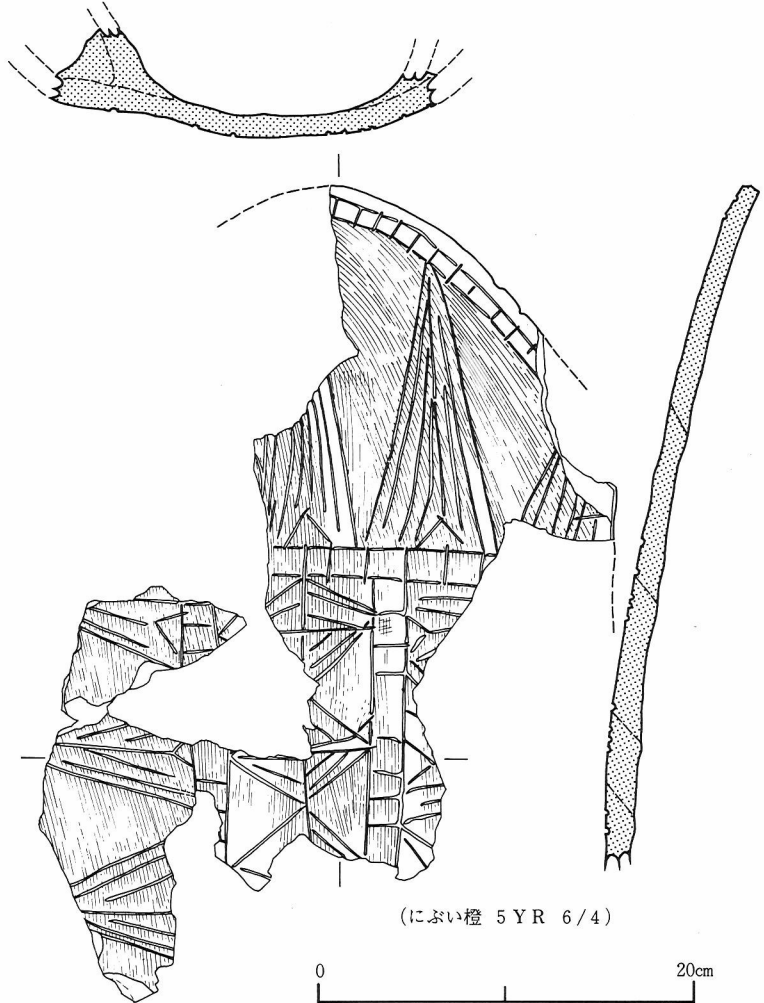
ている。

その中で特徴的な点は、まず2号墳と同様、人物埴輪の比率が高いことがあげられる。器財形埴輪としてとりあげた琴、太刀についても人物に付属していた可能性が高く、今回の出土例の中では最も比率が高くなっている。

人物埴輪では、その製作技法に共通性がみられる。まず、頭頂部を除いて粘土紐の輪積みをする事、内面のユビナデが丁寧な事、また顔面内部は縦方向、他は横方向のユビナデを施す点が考えられる。外面の調整は顔面をナデで平滑にし、後・側頭部はタテハケを施し、頭髪の実現とするなど、

人物の実現と調整をかねた合理的な製作技法が観察できる。

円筒埴輪では、底部の出土例が少ないものの、4類が観察できた。この4例では、外面に板を当てて底部を調整するもの（F類）、外面を板状工具で叩くもの（G類）、底部をヘラ切り後、さらに底部調整を行った可能性があるもの（H類）があり、底部調整技法に変化がみられる。特にH類は、形象埴輪の基部と考えられ、形象埴輪においても底部の製作について、円筒埴輪と同様の配慮がされており、2号墳に比して丁寧な製作が行われているといえるのではなかろうか。



第25図 3号墳出土土盾

Ⅳ 2号墳・3号墳出土の須恵器

2号墳出土の須恵器（第26・27図）

ここに図示した大賀世2号墳の須恵器は昭和35年に調査を実施した際に発見されたものである。⁽⁸⁾出土須恵器には杯・蓋・壺・器台・甕が認められる。

杯（1・2）

1・2ともに口径11.0cm前後、高さ約5.3cmで丸味をもつ底部に内傾気味に立つちあがりがつく。口縁端部は段を構成するもの(1)と、内側へ傾斜する面をもつもの(2)がある。蓋受部はやや上方へのび端部は丸くおさめる。器壁は全体にやや厚手で凹凸がめだつ。底部外面は約 $\frac{2}{3}$ を回転ヘラケズリ調整し、内面は底部中央に仕上げナデを施すもの(1)がある。ロクロの回転方向は右まわりである。

蓋（3～7）

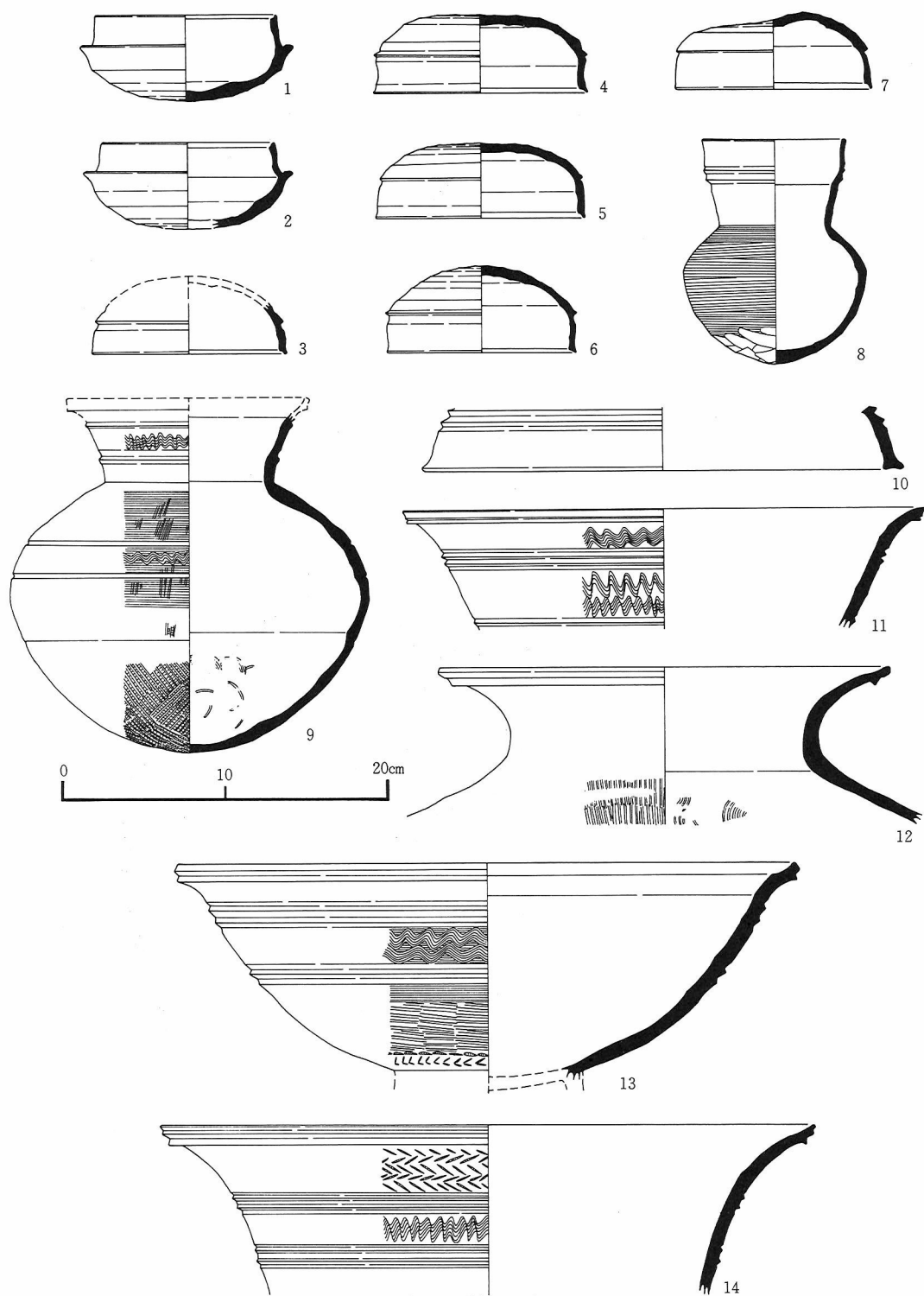
4は口径13cm前後、高さ約4.7cmを計る。天井部はやや扁平で、天井部と体部とを分ける稜は鋭く若干張り出し気味におさめ、口縁端部は内傾する面をもつ。天井部は逆時計回りのロクロによって約 $\frac{2}{3}$ を回転ヘラケズリする。胎土は緻密で焼成は堅緻である。3・5・6・7は全体に小型で天井部が丸味をもっている。天井部と体部の境界をなす稜は、鋭さに欠ける。口縁端部は内傾する面を有するもの（3・5・6）と、段を構成するもの(7)がある。天井部は約 $\frac{1}{3}$ を時計回りのロクロで回転ヘラケズリするもの（5・6・7）がある。天井部内面には、仕上げナデが認められるもの（6・7）と、同心円状を呈する当て具の痕跡をとどめるもの(5)がある。胎土は微細な長石・チャート・黒色粒を含みやや粗く焼成も若干甘い。

壺（8・9）

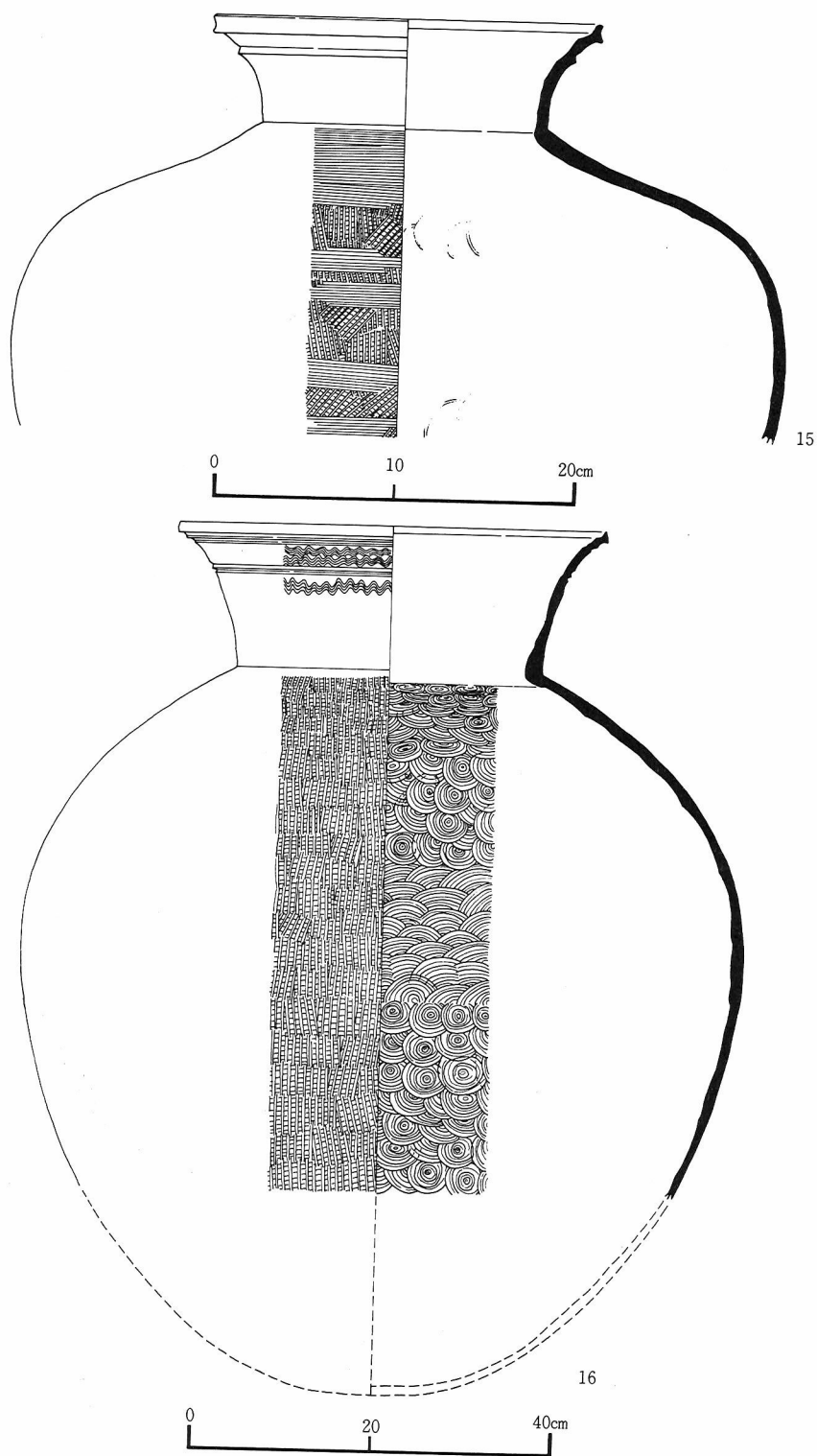
8は口径10.8cm、高さ13.6cmの直口壺である。口縁端部は丸くおさめ、口頸部はわずかに外上方へのび、2条の突帯をめぐらす。体部はいちじく形にちかく全体をカキメ調整した後、底部に手持ちヘラケズリを加える。胎土はきわめて緻密で焼成は堅緻である。9は朝顔形に外反する口頸部に断面三角形の突帯を2条めぐらし、その間に櫛描波状文を施す。体部には最大径のやや上位に2条の凹線をめぐらし凹線間に1条の櫛描波状文がある。体部上半部は右上がりの擬格子タタキメ成形後カキメ調整で仕上げている。体部下半部は擬格子タタキメを逆時計回りに7分割にわけて叩き締めている。体部内面上半部は当て具痕を丁寧にナデ消しているが、下半部には一部当て具痕をとどめている。

器台（10・13）

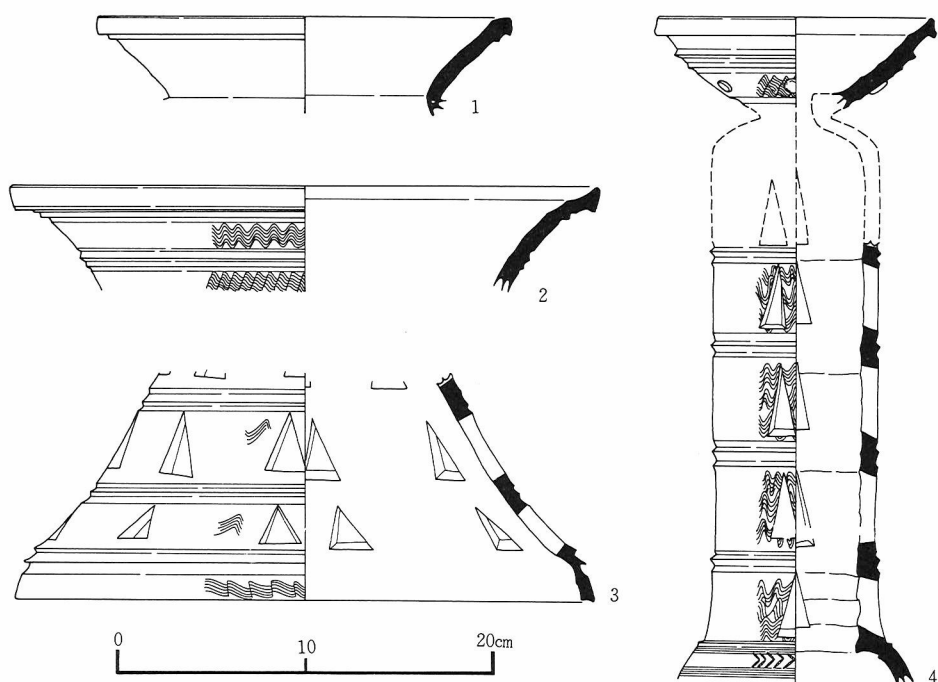
13は口径38.4cmの高杯形器台の杯部片である。杯部は比較的浅い形態を呈し、口縁部は外上方へ短く屈曲する。口縁端部には1条の突帯をめぐらしやや複雑化する傾向をもつ。杯部には突帯と2段の櫛描波状文を施し、さらに杯底部にも羽状列点文を用いて装飾している。杯部下半には水平方向のやや粗い平行タタキメを明瞭にとどめるが、杯部上半にはさらにカキメ調整を加えている。10は脚径29.7cmの脚部片で脚端部は面を有する。透し孔の配置・形態・数等につ



第26図 2号墳出土須恵器



第27図 2号墳出土須恵器



第28図 3号墳出土須恵器

いては小破片のために不明である。内外面とも丁寧なヨコナデ調整で仕上げている。

甕 (11・12・14・15・16)

甕には口頸部がゆるく外反し、端部で上下にわずかにのび面をもつもの(11・14・15・16)と、端部を丸くおさめるもの(12)がある。原則として口縁部直下に突帯をめぐらしている。さらに口頸部に数条の断面三角形の突帯を施し、突帯間に楡描波状文や羽状列点文を加え、装飾性に富むもの(11・14)がある。器体外面には平行タタキメをのこすもの(12)と、擬格子タタキメの後カキメ調整をおこなうもの(15)が存在する。器体内面には当て具の痕跡である同心円文をナデ消すもの(12・15)と、そのまま同心円文を残すもの(16)がある。なお、これらのタタキメや同心円文については後に詳しく記述する。

3号墳出土の須恵器(第28図)

大賀世3号墳の調査概要についてはすでに公表されており、出土遺物として須恵器・円筒埴輪・形象埴輪等について掲載されている。このうち須恵器は周濠内より杯・甕・有蓋高杯・器台が出土しており、図示できた4点を掲載した。

甕(1・2)

1は口径21.7cmを計る口縁部片で、口縁部は朝顔形に短く外反し端部は面をもっておさめ、端部直下には1条の突帯をめぐらす。内外面とも丁寧なヨコナデ調整で仕上げている。胎土内に微細な長石粒・黒色粒を含み、焼成は堅緻である。2は口径31cmの外反する口縁部片で、端部はわずかに上下にのび面をつくる。口縁部には断面三角形の鋭い稜をなす突帯と楡描波状文を

交互にめぐらし装飾性に富んでいる。内外面はヨコナデ調整によって入念に仕上げている。

器台 (3・4)

3は器台の脚部片で脚径30.6cmを計る。脚部は「ハ」の字形に開き、裾部でやや内方へ屈曲している。脚端部は若干内傾する面をなす。脚部は突帯によって3段以上に区分し、各段には櫛描波状文をめぐらす。また、ほぼ同大の三角形透しを縦一列に配置している。脚部内面は丁寧なヨコナデ調整で仕上げる。4は筒形器台の受部及び筒部から台部片である。受部の端部は上部に面をもち、受部中央には2条の突帯と2段の波状文及び円形浮文を配している。筒部は突帯によって少なくとも5段に区画され、各段には3段の波状文を施し、さらにほぼ同大の三角形の透し孔を4方向から縦一列に配置している。筒部内面はナデによって調整しているが、一部に粘土紐の継ぎ目が明瞭に残存している。胎土、焼成とも良好である。

須恵器のタタキ成形について

須恵器の甕・壺等に広く認められる叩き技法については、田辺昭三氏、中村浩氏などによって主に成形工程における叩き技法の位置付け、タタキメや当て具痕の分類とその技法的変遷について明らかにされた⁽¹⁰⁾。また、横山浩一氏はタタキメの方向や重複関係などを取り上げ、須恵器の丸底の壺・甕は原則として一旦平底に成形され、後の工程で丸底に叩き上げられ、例外として大型甕は最初から丸底の形で成形されているという研究を発表した⁽¹¹⁾。この研究は器面におけるタタキメのあり方を製作過程と関係させて取り上げたものであった。さらに今後の課題としてタタキの進行方向や、全面につけたタタキメの上にさらに部分的なタタキメを付加する手法の問題や側面二重叩きの問題などを提示している。その後は横山浩一氏の研究成果、課題に対するいくつかの研究が行なわれている⁽¹²⁾。このような様々な研究成果を基礎に大賀世2号墳出土の甕・壺にみられるタタキメについて考えてゆきたい。

大賀世2号墳出土の甕⁽¹⁶⁾の器表におけるタタキメは、体部全体にやや右上がりの斜位ないしは正縦位の方向をとる擬格子タタキメである。タタキメは複雑に重複しており、タタキの進行方向や叩き締め⁽¹³⁾の円弧については明確にできなかった。

内面の当て具痕は外面のタタキメにくらべ、相互の重複関係や進行方向を比較的捉えやすい。また、当て具痕は外面のタタキメと対応して施されることから当て具の運動方向は外面のタタキメの動きと同一の運動をすることになり、タタキの進行方向や成形法の観察にはきわめて有効的である。このようなことを考慮して体部内面を観察すると、当て具痕は一般的に認められる同心円文で内面の部位や当て具の重複状態によって波状や同心円状を呈している。これらの当て具痕は大きく体部上半部(A)・体部中央部(B)・体部下半部(C)の3ブロックに見分けることができる⁽¹⁴⁾。この3ブロックはほぼ一線を画して明瞭に分れる。3者の重複関係は、Cブロックの当て具痕がBブロックの当て具痕に先行しており、さらにBブロックはAブロックに先行している。したがってA～CのブロックはC→B→Aのブロックの順に下方から積み上げていることになる。

各ブロックの当て具痕は、Aブロックは巾約20cmで当て具痕は同心円状をなし、下方より上

方へ右まわりに進行している。Bブロックは、巾約15cmを計り当て具痕は波状をなし、その進行方向はAブロックとは逆に上方から下方へ右まわりに進行している。なお、Bブロックの当て具痕はA・Cブロックの当て具痕に比しやや大型で、使用している当て具が異なる可能性がある。体部下半にあたるCブロックの巾は底部が欠損しているため明らかではない。当て具痕は同心円状をなしAブロックと同一の運動をしている。各ブロック内での叩き締め⁽¹⁵⁾の順序と進行方向については、当て具痕の観察結果から上述したような結果を得たものの、その形成過程には叩き締めを縦方向に連続的に施すことを繰り返して器面を一周する場合と、横方向に一周しこれを帯状に繰り返して器面を埋める場合を想定することができる。

16のような大型の器形は一気に体部全体の成形をおこなえば粘土の自重などで形を形成することは困難をきわめたものと思われる。そのため成形の途中で粘土帯の積み上げ作業を一時休止し、粘土の乾燥を行ない、粘土帯積み上げと叩き締め作業を交互に繰り返したものと推定できる。このようなことから体部内面に認められたA～Cブロックは、粘土帯の積み上げの単位を示すものと推測できる。したがってこの場合、体部は最底3工程で成形したことになる。

なお、口頸部については体部成形後、頸部先端上に口頸部をのせ接合し、さらに頸部内面に粘土を加えて補強している。

小結

以上の観察結果により大賀世3号墳の須恵器は、甕、器台等の小破片が少量出土しているのみで、その所属時期については限定し難い側面がある。しかし、その内で筒形器台については、⁽¹⁶⁾類例が長原27号墳・新沢281号墳等にある。これらの古墳は5世紀末から6世紀初頭頃のものと考えられており、大賀世3号墳もほぼこの時期にあたるものと推定できる。

一方、大賀世2号墳出土の杯・蓋は全体に小型でたちあがり内傾気味に立ち、口縁端部は内傾する端面を構成している。底部及び天井部は丸味をもちヘラケズリの範囲が狭くなっているものが主体をなす。これらの他にやや大型の形態を呈し天井部が若干扁平でヘラケズリが広い範囲に及ぶやや古い様相を示すものを含んでいる。壺・甕・器台等では、口縁部が上下にのび、やや複雑な形態をなすものが目立つ。調整法は外面のタタキメの上にさらにカキメ調整を施すものや、内面の当て具痕をナデ消すものが主体を占めている。突帯は鋭さを欠き、やや粗雑な感がある。突帯間には櫛描波状文や羽状列点文などを1～2段施している。これらの文様のうち櫛状原体による列点文が甕の口頸部や器台の杯底部及び、3号墳の筒形器台の台部上端など比較的多くの製品に認められる。

なお甕とした11については、土器の傾きからみて器台の杯部になるかもしれない。また12は、口頸部から体部にかけて強く屈折せず、ゆるやかに移行し、口縁端部も丸く仕上げていることから、たいへん新しい傾向を持っているものと考えたい。

これらの諸特徴から、大賀世2号墳出土須恵器は大半が6世紀初頭前後にあたるTK23型式からTK47型式の範疇に属するものと考えてよいだろう。⁽¹⁸⁾したがって、大賀世2号墳・3号墳出土須恵器には大きな時間差は見出せない。

V まとめ

2号墳、3号墳の出土遺物の観察により、下記の事実と問題点を挙げてまとめとしたい。

1. 円筒埴輪と形象埴輪相互における成形・調整技法については、2号墳、3号墳出土遺物ともに共通性のあることが観察できる。このことは、胎土や焼成状態を含めて同一工人集団、同一窯の所産であろう。しかしながら2・3号墳間の技法についての共通性は殆ど認められず、短時間における築造ながら、埴輪供給体制の変化をうかがわせる。
2. 築造時期については、出土須恵器より両墳とも6世紀初頭前後と考えられ、両墳の時期差は見出せない。
3. 両墳の埴輪を比較した場合、2号墳の底部調整が外面板押え、内面ユビオサエが大半であるのに対し、3号墳ではそれ以外に、外面の叩き、底面のヘラ切りが加わっている。底面のヘラ切りは川西氏編年のⅣ期に属する瓜生堂上層遺跡出土埴輪⁽¹⁹⁾にも認められるものである。また、盾の製作については、2号墳が円筒の基部に鱗状の粘土を貼り付け盾面とするのに対し、3号墳では盾面全体を貼り付けている。これらの点から、両墳の埴輪は、ともに川西氏編年のⅤ期に属するものであるが、3号墳出土埴輪にⅣ期の様相が残っていると考えられ、3号墳を2号墳に先行するものと考えたい。

注

- (1) 藤井直正、都出比呂志『原始・古代の枚岡1・2部』1966。
- (2) 下村晴文、上野利明『半堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要23 東大阪市教育委員会 1982。
- (3) 資料公開について快諾いただいた永塚工業株式会社社長、永塚奎次氏に心より謝意を表する。
- (4) (2)前掲書。
- (5) 円筒埴輪の調整技法の特徴は、口縁部では形式毎の差違は認めにくく、今回特に口縁端部の形状により分類した。また調整技法等の用語については、川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号 1979。
- (6) 野上丈助『大阪府の埴輪』大阪府立泉北考古資料館 1982。
- (7) (2)前掲書。
- (8) (1)前掲書。
- (9) (2)前掲書。
- (10) 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園研究論集第10号 1966。
中村 浩『陶邑Ⅰ』・『陶邑Ⅱ』大阪文化財センター 1976・1978。
- (11) 横山浩一「須恵器の叩き目」『史淵』第117輯 九州大学文学部 1979。
- (12) 梅崎恵司他『狸山A遺跡』北九州市教育文化事業団 1981。荻野繁春他『老洞古窯跡群発掘調査報告書』岐阜市教育委員会 1981。横山浩一「狸山A遺跡出土須恵器の渦巻文叩き目をめぐって」『森貞次郎博士古稀記念論文集』1982。植野浩三「須恵器甕の製作技術」『奈良大学文化財学報第1集』1982。
- (13) 前掲注一(11)によると、器高が数十センチに達する大型甕では、いかなる理由によるのか明らかではないが叩き締めの円弧のあらわれ方が不明瞭であると指摘している。
- (14) Bブロックに関しては、さらに二分できる可能性が十分ある。

- (15) 佐原真「平瓦桶巻き作り」『考古学雑誌』58巻2号 1972。「土器の話10」『考古学研究』19巻第3号 1973。
- (16) 『長原一近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財調査概要報告書』大阪文化財センター 1982。
- (17) 伊達宗泰他『新沢千塚古墳』橿原考古学研究所 1981。
- (18) (10)前掲書。
- (19) 芋本隆裕『瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡発掘調査報告』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要報20 東大阪市教育委員会 1979。